# プリムラの花束を

雪苺

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

特徴は起源の影響でちょっと変わった魔力を持つだけの、特にいてもいなくても変わらない女の子が自分なりに一生懸命生きていく話。■純粋なカドアナが好きな人は注意してください。■原作以外にも日常パートも書きたい所存。■不定期更新です。■☆は時系列特に考えてないやつです。主に番外編とかに使う予定です。▼５章の人物の生死確認まで休載します。すみません。

# 目次

1部序章
序章に至る為の道のり ―― 1
序章 ―― 9
幕間～藤丸立香のささやかな願い～ 18
幕間～月の夢　上弦～ ―― 24
幕間～月の夢　下弦～ ―― 33
1部4章
目覚めと記録 ―― 45
猫のご飯とお散歩計画 ―― 52
物語が進む傍らで ―― 61
藤丸立香は守りたい ―― 71
鏡を見つめる ―― 82
番外編
☆バレンタインは戦争だと云々～藤丸立香side～ ―― 93
☆バレンタインは戦争だと云々～雪白栞side～ ―― 101

# 1部序章
# 序章に至る為の道のり

私、雪白栞(ゆきしろしおり)はカルデアのマスター候補の補欠の補欠として迎えられた。
私は、元々雪白家ではスペアにすらなれない不要な者として扱われていた。当初はスペアとして教育しようとしていたが、初期の頃に私には家にとって必要な才能が無いことがわかったのだ。
何処かに養子に出そうにも中途半端に雪白家の秘匿を知ってしまったばかりに、下手に他所の家に出せない。家からしたら私の存在は完全に邪魔者でしかなかった。
そんな私の人生の最初の転機は父が行っていた学校の同期だったというマリスビリー氏が我が家に訪れた日だ。マリスビリー氏が詳しくは言えないが、今後の計画でマスター候補を探しているという話を聞き、父はここぞとばかりに私のことを薦めた。
分かりやすく厄介者を押し付けようとする魂胆が見えているマリスビリー氏は最初は乗り気では無かったが、学友だった父の手前無下に出来ずに、形式上の検査をすることになった。

結果はあちら側にとっては当たりだったようで、最初の態度が嘘のように、是非とも我がカルデアに迎えたいと手のひらを返すように言った。

――これは後から聞いた話だけど、何でも私の魔力が少し変わっているそうで、変わり種として迎えたのだそうだ。

そんな感じで、私は家からほぼ勘当される形でここ、人理継続保障機関フィニス・カルデアへの移住が決定したのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カルデアに移ってから3年がたった。

あれから色々な事が起きた。

マリスビリー所長は亡くなって、その後に娘のオルガマリーさんが新しく所長になった。

彼女は魔術の才能は高いのにマスター適正とレイシフト適正がなかった。その為か、マスター適正とレイシフト適正が一定値あるにも関わらず、魔術師としてかなり未熟な私を毛嫌いしていた。補欠の補欠というさして重要でもない私の立場も彼女が嫌う原

因の1つだろう。
この一件でドクターロマニとレフ教授から呼び出され、改めて魔術の教育を受ける事を言い渡された。
ただし教師役は二人ではなく、Aチームの一人、カドック・ゼムルプスさんが空き時間を使って行うそうだ。
魔術の教育は有難いけど、正直Aチームの人の手を煩わせる事はしたくなかった。けれども、あちらも規格外の天才達に囲まれて気をもんでおり、少しでも悲観的になってしまうところを改善させたいという理由があったのだ。
この話はほぼ拒否権はなく（恐らくあちらも似た感じで）決定した。

魔術の教育は順調に進んでいる。
最初こそお互い渋々なところがあり、ぎこちなかった。だけど、ゼムルプスくんはどうやら勉強家で努力の人らしく、どんな質問もすぐに答えてくれて、それがだんだん楽しくなった。
お礼や尊敬の言葉を伝えると「こんなの大した事じゃない」「これぐらいの基礎魔術、出来て当然だ」と言葉こそ素直じゃないけど、口が若干緩んでいるのでかわいい人だと思う。

それなりに楽しい日々を過ごしていたが、とうとう所長の不満が爆発した。泣きそうな顔で怒鳴ってきた。

「なんでこんな未熟な人間が……！」「私は全然認められなくて辛いのに……あなたはのうのうと過ごして！」

冷静に聞けば、所長もきっとストレスがたくさん溜まってて、たまたま近くにいた私にぶつけてしまっただけだとわかる。

けど、私は彼女の話を聞いて怒りがふつふつと沸き上がる。私も知らないうちにストレスが溜まっていたみたいだ。気づいたら泣きながら叫んでいた。

「所長が凄い人なのはわかってるけど、私だって頑張ってる！」「貴女に認められたくて頑張ってるのに否定しないで！」

これも冷静に聞けばかなり自己中極まりない言い分だった。端から見たら小さい子どものケンカにしか見えないだろう。

しばらくして、ドクターとレフ教授が慌てて駆けつけて来てくれた。私は最近この二人に迷惑かけすぎだ。

ドクターからメンタルケアを受け終え、冷静を取り戻してから途方に暮れながら廊下

を歩いていた。
お互い正気ではなかったとはいえ、ほぼ一般のスタッフが所長に楯突いたのだ。絶対ただじゃすまない。
流石にカルデアにそこそこ暮らしているから、秘匿の関係で追い出される事はないとは思う……思いたい。もし、追い出されたら家からほぼ勘当されているような状態だから路頭に迷う事になる。……どうしよ。
壁に頭をつけて1人でぶつぶつと独り言を言いながら後ろ向きな思案に沈んでいると、後ろから肩に手を置かれた。振り向くと、若干引いた顔をした所長が立っていた。え、気まずい。
沈黙が続くなか、所長が咳払いをして話始めた。
「確かにただのスタッフが上司たる私に楯突いた事はクビになっても可笑しくない愚かな行為です。……けど、今回は件はお互い正気ではなかったし、元はと言えば私から仕掛けたも同然なので、特別にこの件は不問とします」
「え、い、いいんですか?」
私を毛嫌いする所長が許した事に動揺を隠せずいた。
追い出されはしなくても、それなりの罰があるとは思っていたからだ。
「もう決めた事よ。……あと私の事はマリーと呼んでいいわ。私も名前で呼ぶから」

「え」

……何故？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あの一件からマリーと呼ばないと微妙に睨んでくるようになった。いったい、何が彼女の琴線に触れたのか全くわからない。

それともう1つ変わった事がある。Aチームの何人かが話しかけてくるようになったのだ。主にヴォーダイムさんとオフェリアさん（ファミリーネーム呼びは断られた）とペペさん（本人の希望でそう呼んでる）の三人だ。マシュさんはたくさんではないけれど何度か話した事がある程度だ。1度だけ芥さんと会ったけど、少し眉をひそめて「臭う……」と言われてから見かけてない。毎日お風呂に入っているんだけどなあ……。

話しかけてくるのは大体ゼムルプスくんから魔術を教わっている時が多く、話すのは楽しいけど、去り際にやっている内容の解説をしてくれるので、その度にゼムルプスくんは少し複雑そうな顔をしていた。

「なあ、あんたはこのまま僕から教わってていいのか？」

「？どういう事ですか？」

「……他の奴らから教わった方がいいんじゃないか？僕なんかよりずっと優秀で、もっと色々学べるだろ」

ゼムルプスくんは顔を俯かせていて、表情が見えない。何だか泣いているように見えるのは、気のせいなのだろうか。

「……そんな事ありません。私、ゼムルプスくんから教わりたいです。ゼムルプスくんがいいんです」

「こんな凡庸でいいのか？」

「それを言ったら私はそれ以下なんですよ？あんまり自分を卑下しないで下さい」

「……ははっ、そっか。そうだな」

「それは悪かった」と顔を上げた。その顔は優しげに微笑んでいて、私は少し安心した。

「そういえば、聞こうと思っていた事があるんだ」

「私にですか？」

何だろうと首を傾げる。ゼムルプスくんから聞きたい事なんて珍しい。

「ああ。あんた、魔術はほぼ素人で適正も数値がそれなりの割りには、昔からカルデアにいるよな。何か他の理由でもあるのか？」

さらっと酷い事を言われた気がする。今更気にしないけど。

「ああ、詳しくは私も知りませんけど……。私の魔力が他より変わってるらしいですよ

？要は変わり種です」

私は昔聞いた話をそのまま答えた。ゼムルプスくんはあまり納得がいかないという顔をしているが、知らないものは知らないのでどうしようもない。

何が変わってるのかなんて、私が知りたいぐらいだが、その理由を知るマリスビリー氏はもういないのだ。

「……魔力の量か質が珍しいのか？けど、それが変わり種として迎えるような内容か？」と考え込み始めたゼムルプスくんを見ながら、私は今後の事を思う。

いつかグランドオーダーが始まり、今みたいな日常を過ごすのはきっと難しくなる。ならばせめて、皆が無事にカルデア（こ）に帰れますように、と。

――――そんな叶えもしない願いを抱くのだ。

# 序章

２０１５年某月某日
人理継続保障機関フィニス・カルデア

とうとうこの日がやってきた。
人理を守る為の作戦、「グランドオーダー」が実行される。
少し前にミッションの成功への重圧があるのか、いつもよりカリカリしているマリーを見かけた。
廊下の壁に凭れているゼムルプスくんも落ち着かないのか、先程からそわそわしている。……私も人の事言えないけれど。
「……とうとう今日ですね。緊張していますか？　」
「そう、だな。緊張していないと言えば嘘になる。……けど、ミッションは必ず成功させるさ。……必ず」
声は緊張からか微かに震えていたが、目は決意に満ちた光を灯していた。
その姿が何だか嬉しくて、つい笑みがこぼれてしまう。

「はい、きっと大丈夫です。私、モニターの向こうで皆さんを応援しています」
「……あんたは今回のミッションは不参加だったな」
「補欠の補欠なので……。むしろ私が参加するような事態にならない方が一番いいんです」
マスター候補４８人目が見つからなければ、私が参加する事になっていた。けど、なんとかギリギリで最後のマスター候補が見つかったので私は今回の作戦では出番がない。
それでもこの先、マスター候補の人数が減るような事があれば、私が動員される。出来る事なら私の出番がないまま終わって欲しい。
けど、こういう時に限って嫌な事が起こりそうで……怖くて、たまらない。
「……雪白？大丈夫か？」
不安な気持ちが顔に出ていたのか、ゼムルプスくんが少し心配した顔で言った。
「え？あ、ごめんなさい。ちょっとボーッとしてて……」
「いや、大丈夫ならいいんだ」
私が慌てて言い繕う姿を見て、ゼムルプスくんは安堵した顔に変わっていた。その後、思い出したかのように時間を確認する彼につられて、私も時間を見る。
もうブリーフィングが終わる時間だ。

「じゃあ、そろそろ時間だから僕はもう行く」
「わかりました。私は一度部屋に戻ってから向かいますね。ゼムルプスくん、どうか頑張って」
「ああ、行ってくる」
ゼムルプスくんは薄く笑ってそう言った後、管制室の方へと歩いて行った。
私はその背中をしばらく見続けた後、自分の部屋へと向かうべく、反対側へと歩き始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

先程ブリーフィングを終えて何故か不機嫌なマリーから連絡があり、集まる時間に遅れた挙げ句、説明中に居眠りをしたのでファーストミッションから外した人がいると愚痴を聞かされた。わざわざ通信してまで言うのだから、相当鬱憤が溜まっているのだろう。
……それにしても、あのマリーの説明中に居眠りだなんて大物だ。ある意味尊敬する。
外されたという事は部屋に待機しているはずなので、後で隙を見て会いに行こう。と

んだ問題児かもしれないけど、もしかしたら仲良くなれるかも……。
と、友達は欲しいし……うん。
「おや、そこにいるのは栞君かな？」
廊下の向こうからレフ教授がこちらへ歩いて来た。
彼からはとてもよくしてもらっているので感謝の気持ちが大きいが、時折怖い時があるので少々苦手だ。
「あ、レフ教授。……こんにちは」
「こんにちは。これから中央管制室に向かうのかな？」
「は、はい。何も出来ないので、ただの見学になるんですけど……」
「君は補欠の補欠だからね。もしもに備えて、どのようにレイシフトするのか見ておくのも立派な仕事だよ」
「……はい」
レフ教授はいつも通り、微笑みを浮かべたような表情で言った。
分かってはいても、見ることしか出来ないという事は、なかなか心に来るものがある。
レフ教授は、少し思考する素振りを見せ、指で顎を撫でながら提案をしてきた。
「ふむ、そうだ。見学するならオルガの横で見させてもらったらどうかな」
「え、でも……マリー怒りませんか？」

マリーなら怒る。今日なら特に怒るに決まっている。
「いざとなれば、私から言われたと言えば大丈夫さ。とはいえ、オルガは君になら許すと思うがね」
「そうですかね……」
思わず苦笑する。
とてもじゃないけど、信じられない。
「栞君は気づいていないようだが、オルガは君に対してかなり心開いているからね。……さあ、そろそろ時間だ。引き止めて悪かったね」
「いえ、大丈夫です。……あのレフ教授、いってきます」
「……いってらっしゃい」
私は俯いてレフ教授の顔をまともに見ず、早足でその場を立ち去った。
彼がどんな顔で私を見ていたのか、知りもせず……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

中央管制室に着くと指示を飛ばしているマリーを見つけ、そっと近づいてみる。
マリーの方も近づく私に気づいて体ごとこちらに振り向き、眉間に皺を寄せていく。

「……栞？何で貴女がここまで来ているの？あらかじめ伝えていた場所に戻りなさい！」

案の定怒られた。

……本当にマリーは私に心開いているのだろうか。レフ教授の気のせいなのでは……。

ダメ元でレフ教授に言われた言葉を伝える事にした。

「えっと、レフ教授がせっかくだからマリーの横で見学させてもらったらって言われて……」

「レフが？……何を考えているのかしら。でもレフの言うことに間違いはないから、きっと何か考えが……」

よく聞こえないが、ぶつぶつと独り言を言いながら考えをまとめているようだ。

「あの、マリー？」

「……いいでしょう。私の近くで見学する事を許可します！ただし、余計なことはしない事が条件よ。まあ、貴女ならそんな失態は起こさないとは思うけど……」

本当に許可が出た……！

少し不満げな顔をしているけども。

本当にマリーはレフ教授を信頼しているんだな……。信頼というか依存とか盲信に近い気がして心配だけど。

それからしばらくマリーが指示を飛ばしている姿や、スタッフの人達が忙しく何かを打ち込んでる姿を見ながら過ごした。

レイシフト開始まであと１０分もないというところで、マリーが何かを思い出したかのようにこちらを見た。

「そうだわ、栞。貴女に私の部屋から取ってきて欲しい物があるから、行ってきてちょうだい。キーは渡しておくわ」

「いいですけど。でも、もうレイシフト始まりますよね？」

キーを受け取りながら質問をする。

出来る事ならレイシフトする場面が見たい気持ちがあるからだ。

「別に、レイシフトする瞬間そのものは、この先も見る機会は何回もあるのだから問題ないわ。今動けるのは貴女しかいないのだから、早く行って！」

「は、はいぃ！」

思わず情けない声が出てしまった。恥ずかしい。

私は早足で管制室から出ようとする、と。

「あと！」

「……？」

何故か急いで立ち去ろうとする私をマリーが慌てたように引き止めた。

顔を見ると頬が薄く赤らんで、目線は少し私から外している。

少し間を置いて、今度は目線も私の方をしっかり向けて発言する。

「このミッションが終わった後、話があるから時間を空けておくように」

「はあ、わかりました……」

今度こそ会話を終えてから、急いでマリーの部屋に向かう。

これからも機会はあるとは言っても、ファーストミッションなのだからこの目で、しっかり見届けたかった。

マリーの部屋まで、あと少しというところで私はあることに気づいた。

「あ、何を取ってくればいいのか、聞くの忘れてた……」

レイシフトの時間に何とか間に合わせようと、急ぎすぎて失念していた。通信機器も管制室に置いて来たので、連絡して聞くことも出来ない。これでは、どう頑張っても間に合わない。

大きなため息をつく。仕方がない、1度戻って聞きに行こう。運が良ければ丁度レイシフトする所が見れるかもしれない。

そうやって振り向いた瞬間、大きな爆発音が響き渡り、目の前に黒い煙がきて――――。

そこから先の記憶は、ない

# 幕間～藤丸立香のささやかな願い～

「この子が雪白栞さん……」
「はい、彼女が栞さんです」
あの爆発から比較的離れた場所にいたから、奇跡的に助かった女の子。
それでも爆風によって壁に打ち付けられ、頭を強く打ったらしく、昏睡状態のまま起きる兆しは今のところないそうだ。
マシュは俺の隣から栞さんを見つめて、当時の状況をポツポツと話してくれた。
「……何故、彼女が比較的離れた場所にいたかは、詳しくはわかっていません。ただ、中央管制室から出る直前に、所長と何か話してたみたいです」
「じゃあ、偶然でも所長が栞さんを助けたんだね」
「そうですね……」
俺は栞さんに強い関心を寄せている。その理由は所長が関わっていた。
――救いたかったけど、救えなかった。
――手を伸ばしても届かなかった。

俺達は所長がカルデアスに身を沈める姿をただ見る事しか出来なかった。
だからだろうか、それが偶然の結果だと分かっていながら所長が救った彼女を守りたいと思っている。けど、それは彼女からしたらいい迷惑なんだろうなあ……。
とりあえず、栞さんがどんな人なのか知ることから始めよう。マシュなら何か知ってるかもしれない。
「ねえ、マシュ。栞さんってどんな人？」
マシュは栞さんを見つめるのを止め、俺の方へと顔を向ける。
「あまり栞さんと話す機会はありませんでしたが、困ったように笑う顔が印象的な人です。魔術師としてかなり未熟だと、頑張って勉強している姿もよく見ました」
一拍置いて、何故俺がそんな質問をしたのか察してくれているみたいでマシュは少し微笑んで、俺が今一番求めている言葉をくれる。
「栞さんは優しい方なので、きっと先輩ともすぐに仲良くなれます」
「なら、嬉しいなあ……」
マシュの笑みにつられて、俺もへらりと笑う。
早く起きないかなあ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

栞さんと初めて会った日から1ヶ月経つけど、まだ目覚める兆しがない。

それでも彼女が起きると信じて、俺は戦い続けている。最近はどんな小さな特異点でも、修復を終えたらここに来る事が習慣になりつつある。

果てしない目標よりも、こうして目に見える目標の方が俺にはいい。栞さんを利用しているようで悪いけど、「世界を救え」よりも「栞さんに報告する為に問題を解決する」の方が個人的に精神的負担が全然違うのだ。

まあ、レイシフト中はそんな事考えてる余裕は全然ないのだけど。けど、カルデアに戻るとどうしても色々考えてしまうのだ。このグランドオーダーがどれだけ果てしないものなのか。自分の背中にどれだけ重いものが乗っているのか。

所長も冬木で、マスター候補達を凍結保存をすると決めた時に「それだけの死を背負えない」と言っていた。あの時は特に何かを感じる事はなかったけれど、今ならなんとなく分かる気がする。

今日も栞さんが眠る部屋に行き、ベッドの横にある椅子に腰を掛ける。

栞さんは穏やかに眠っている。自然と笑みが出た。

「栞さん、ただいま。今日も俺、頑張ったよ。今回は月見団子を取り戻す為にバタバタしちゃってさ。……ははっ、改めてきっかけを思い出すと笑えるなあ」

その時行った特異点の事、今日のご飯も美味しかったとかくだらない話を一方的に報告する。

きっと彼女には届いていない、それでも俺は話すのを止めない。――こうやって、いつも気持ちの整理をしているから。

栞さんの顔を覗き込む。いつもと変わらず、穏やかに眠っている。たまに死んでしまっているのではと、心配になる。呼吸で微かに動くのを確認して、もう1度座り直す。

「……ねえ、栞さん早く起きて？俺を褒めて？きっと俺は貴女から褒められたいんだ。スタッフでも俺のサーヴァントでもない、俺と同じマスターである貴女に……」

消えてしまいそうな程小さな声で、俺は栞さんにささやかな願いを呟く。

これは紛れもなく俺の本心だ。マシュもスタッフの人達もサーヴァント達も俺をどんな形であれ、褒めてくれる。時には厳しく、時には優しく、全て俺を思っての言葉だとすぐに分かる。

けど、それじゃあダメなんだ。

俺は他のマスター候補の人達からカルデアへの誘りを、人理修復への想いを奪いつくし、踏みにじったのではないかと不安で不安で堪らないのだ。

その不安は夢として現れていた。炎に包まれた空間、赤く輝き続けるカルデアス、顔の見えない俺と同じ服を着たマスター候補達。俺に指をさして言うのだ。「お前には無

理だ」「なんでお前が生き残った」「お前ではなくこちらの誰かなら確実に世界を救えるのに」。きっとこの言葉は、俺自身が心のどこかで思っている事だ。だからこんなにも心が痛いし苦しい。

俺は許しが欲しいのだ。他のマスター候補の誰でもいいから。「お前はよく頑張っている」とその一言でいいのだ。目覚める可能性が高い栞さんにしか、この願いを叶えられない。

だから、早く起きて……早く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

栞さんと初めて会ってから3ヶ月が経った。

栞さんはまだ、起きない。けど、ドクターは「着実に回復に向かっているから、もしかしたらそろそろ起きるかもしれないね」と、俺を安心させるように言った。

そろそろ起きるかもと言われると、そわそわする。

今は第4特異点を探し出す為にスタッフの人達は交代しながら頑張っている。俺も次の特異点に向けて種火を集めたりするべきなのだろうけど。マシュから「先輩はいつも頑張り過ぎなので、今日はお休みです！」と軽く怒られて、急遽休みになったのだ。

本を読んだりとか、色々一通りの方法で暇を潰そうとしたけど、早々にやる事がなくなり。何も考えずに廊下を歩いていたら、いつもの癖で栞さんの部屋の前まで来てしまっていた。

今日は特にどこにも行ってないし、ただ俺の暇潰しの過ごし方を報告するのもなんだかなあ……と思いながら、部屋のドアを開ける。

栞さんは相変わらず穏やかに眠っていた。

いつものように椅子に腰を掛けて、いつものように報告を済ます。そして、いつものように特に必要のない生存確認の為に顔を覗き込むと。

――瞼がピクリと動いた。

いつもと違う出来事に硬直する。

栞さんの目が徐々に開くと、俺と目が合った。

「……だれ？」

掠れたその声を聞いた瞬間、俺は喜びでどうにかなるのではというぐらいに気持ちを高ぶらせながら、ドクターの元へと走り出す。

「ドクター、栞さんが起きた!!」

――――やっと、褒めてもらえる！

# 幕間～月の夢　上弦～

微睡みの中、意識がだんだんはっきりしてくる。

ああ、もう起きないと……。またマリーに怒られてしまう。

寝惚けながら、目を擦りながら上半身を起こす。すぐ近くに人の気配がして、そちらに振り向く。

誰かが起こしに来てくれたのかな。

「おはようございます、ご主人様。お目覚めになられたのですね」

「……え？」

驚きで目を見張った。

目の前には狐耳に桃色の髪、露出の高い青い着物を着た美女がいたのだ。

あちらは、親しげに話しかけてきたが知らない人のはずだ。こんな特徴的な人、一度でも会えば忘れることなど出来ないだろうし……。

それに、彼女が今しがた発言した「ご主人様」が気になる。ここには、私と彼女しかいないからご主人様とは私の事だろう。

けど、そう呼ばれる理由がわからない。ここは、思いきって本人に聞くのが一番だろ

う。

私は、可愛らしく小首を傾げる彼女に顔を向ける。

「あの、貴女はどちら様でしょうか？」

「なんと!?先程契約したばかりなのに、もうお忘れですか!?私、ショックです……」

ヨヨヨ…と、着物の袖で口元を隠し座り込んだ。

何か知らないけど傷つけてしまった。

それにしても、上品な見た目と違い、愉快な人だ。

というか契約？本当に私と彼女は一体どういう関係なのだろうか。

……だめだ。全然何も思い出せない。

そもそもここは何処なのだろう。カルデアじゃない。学校の教室のようだ……。

とりあえず、いささかわざとらしい反応だが、傷つけたのには変わりない。謝らなければ。

「ごめんなさい。本当に何も思い出せないんです。ここは何処で、私と貴女はどういう関係なのか教えてもらえませんか？」

彼女は泣き真似を止めて、私をまじまじと見つめる。

「むむ、その様子だと本当に何もおぼえてないようですね。……かなりギリギリでこちら側に来たので記憶が飛んでしまったのかもしれません」

「こちら側？」

「えー、こほん。……改めて説明させていただきますね。まずここは月の聖杯戦争の会場、霊子虚構世界通称『ＳＥ（セ）・ＲＡ（ラ）・ＰＨ（フ）』。そして私は貴方様のサーヴァント、キャスターにございます」

聖杯戦争、サーヴァント……。つまり私は彼女のマスターになっているみたいだ。

月の聖杯戦争ということは、ここは月なのかな。月の中に学校だなんて……不思議。

あの後の説明で、月の聖杯戦争は私の知る聖杯戦争とは大きくかけ離れている事がわかった。

そして、敗北は死に直結しているという事も……。

「ご主人様の様子を見るに夢を見ている状態に近いかと……。本来は肉体、精神、魂の三要素を霊子化するのですが、ご主人様は精神と魂の半分がこちら側に来ている状態。なので、地上のご主人様の肉体と残りの魂が目覚めれば、ここにいるご主人様の精神は引っ張られていくので、聖杯戦争の最中に目が覚めて帰る事も可能だと思います」

えっと、つまりは現実の私が起きればわざわざ優勝しなくても、無条件で帰れるって事でいいのかな……？

「それなら、敗退して目を覚ますという方法は……」

「恐らく無理かと。敗退すればもれなく他の方々と同じ様に電脳死すると思いますの

で、あまりその方法はオススメできませんねぇ……」
残念ながら、わざと敗退して帰る事は出来ないみたい。
それなら、もう勝ち進みながら自然と目を覚ますのを待つしかない。
生きて戻らないと……。マリーやゼムルプスくん、みんなの安否が気になる。
「……わかりました。では、私が目を覚ますその時までよろしくお願いします、キャスター」
「はい、もちろん。不肖キャスター、誠心誠意マスターをお守りいたします」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれから何とか3回戦まで勝ち進む事が出来た。
……まさかサーヴァント相手の戦いよりも、アリーナのエネミーに苦戦するとは思わなかったけど。
それについてキャスターは、「紙装甲、紙装甲なのですぅ……！」と悔しそうに言っていた。
正直ここまで来れたのは奇跡なのだと思う。キャスターの耐久力の弱さとかではなく、私のサポート力の無さの事でだ。私はウィザードではないから当然ではあるけど

も、コードキャストなんて1つも覚えていない。
　その事を1回戦の時に気づき、なんとか勝利した後キャスターから必死な顔で手を引かれ、購買部まで一直線だった。その時購買部の人は酷く驚いていた。それはそうだろう、目の前で死ぬ人を間近で見た私は顔面蒼白で今にも死にそうな顔をしていたから。
　この件は礼装を買い終えて、マイルームに着いた時にキャスターが謝ってくれた。
「申し訳ございません、ご主人様。本来ならばマイルームで、すぐに休むべき所を無理矢理連れ出したりして……」
「そんなに頭を下げないでください、キャスター！あれは私を想っての行動なのでしょう？……むしろ私がもっと早く気づくべきだったんです。確かにあの時は辛かったけど、キャスターに何もサポート出来なくてただ見てるしかなかった時も辛かった……。もし、それで、キャスターを失う事になったらと思うと私、私……」
　私は顔を俯き、手を思いっきり握り締める。本当に自分が情けない。キャスターから始めに聖杯戦争の敗者はどうなるか聞いていたのに、戦うのに必要な術を忘れていたなんて。自分が死ぬだけなら自業自得で諦めるけど、こんなにも尽くしてくれるキャスターを裏切る様な事だけはしたくなかったのに。
　だんだん力強く握り締める手をそっと包みほどかれていく。顔を上げると、キャスターがすぐ近くまで来ていた。

「ありがとうございます。ご主人様が私をそこまで想ってくださってると分かっただけ、とても嬉しいです。思えば私はご主人様の事を何も知りません。どうか、私にご主人様の事を教えていただけませんか？」

「……はい！」

今回初めてキャスターとちゃんと向き合えたのだと思う。

微笑むキャスターはとても綺麗だった。

閑話休題。

今は4回戦に向けてのアリーナ攻略も一段落して、食堂に来ている。始めの頃に比べると大分人が減って寂しく思う。それでも今日はいつもより人が集まっているのか沢山の席が埋まっていた。先程から赤いドレスの少女を連れて、麻婆豆腐を乗せたトレーを持った男の子が少し困った様に席を探していた。

あ、目が合った。

……。

「あの、よければそこ座りますか？」

「いいのか？」

「はい、困った時はお互い様ですし」

「ありがとう」と言いながら、私の前に座った。

……この麻婆豆腐よく見たら、死ぬほど辛いと一部のマスターの中で話題に上がっていたやつだ。私も興味があったけど「旦那様の正常な舌を守るのも良妻の務め！」と、キャスターに必死に止められて食べた事がなかった。……うん、何故か旦那様にグレードアップしていた。たまにキャスターがわからない。

「？どうかした？」

「はっ！す、すみません。人の食事をまじまじと見てしまって……」

「いや、気にしてないけど……。君は俺と親しくしてくれるんだな」

「へ？」

思わず変な声が出てしまった。けど、彼が言いたい事はなんとなく分かる。1回戦の前までは、敗北したら本当に死ぬと考えてた人間があまりいなかった。だから話しかけたら大体の人が気楽に会話してくれた。1回戦後は死を意識する人が一気に増えて、軽い雑談ですら嫌がる人も増えた。

実は1回戦後こうやって私と会話してくれる人は彼が初めてだったりする。

変な声を出した事を誤魔化す為、一度「こほん」、と咳払いしてから彼の疑問に答える。

「そう、ですね。私は他の皆さんと違って優勝が目的ではないからでしょうか」

「優勝が目的じゃない？」

「はい。ちょっと特殊な事情がありまして…。優勝は本当に目指してる人がなったらい

いと思います。」
「本当に目指してる人……」
流石に事情までは話せないけど、正直な気持ちを話す。
彼はちゃんと私の話を聞いて、考えてくれている。きっと真面目で優しい人なんだろうな……。
「……私は貴方が優勝すると思っています」
「……俺が？」
「はい。……なんとなくですけど」
本当に勘というか、私の願いだ。そうだったらいいな、ぐらいの。でも本当に優勝するならこの人だとも思う。
理由が特にないのに、こんな気休めの言葉なんて相手に失礼だと今更ながら気づき、謝る。
「こんな事、急にすみません」
「いや、ありがとう。そう言って貰えると嬉しいよ」
「――そなた、先程から黙って聞いていたが……」
「は、はい？」
彼は許してくれたけど、それまで黙っていた少女が重々しく口を開く。怒らせてし

まったのかと、体が強張る。
「奏者を褒めるとは――よくわかっておるではないか！うむ、優勝を目指す気がないと聞いた時は耳を疑ったが、別とは言え目的があるなら納得した。存分に励むがよい！」
「はぁ……」
何故か激励された。自分のマスターを褒められたからなのか、あほ毛が嬉しそうにピコピコしているように見えるのは気のせいだろうか。
彼は少女の方を苦笑して見た後、私の方に向き直った。
「その目的、自分に出来ることがあったら言ってくれ。手伝うよ」
私に手伝いを申し出てくれるのを見て、やっぱり彼は優しい人だと改めて思う。
「ありがとうございます。でも今は祈って待つ事しか出来ないので、お気持ちだけ貰いますね」
「そっか。あ、名前を聞いてもいいか？また会えたら話したいし……。俺は岸波白野」
「雪白栞です。また会えたらぜひお話しましょう」
こうして彼――岸波白野くんとの何気ない交流が始まった。

# 幕間～月の夢　下弦～

ハクノくんと会話を終えてから、マイルームに戻った。
扉を閉めたのとほぼ同時に、それまで霊体化していたキャスターが姿を見せた。ここまではいつも通り。
けど私が普段座っている場所に座ると、いつもは少し離れた場所に座る事が多いのに、今日は私の隣にピッタリと引っ付く形で座っている。横目で見ると心なしかそわそわして落ち着きがないように思う。
キャスターがこうなったのには、実は心当たりがあったりする。
「ねえ、キャスター」
「は、はい。如何しましたか、ご主人様」
「キャスター、ハクノくんがタイプじゃないですか？話してる時ずっとキラキラした雰囲気を感じましたよ」
冷や汗を流しながら、分かりやすく動揺するキャスターに食堂でハクノくんと話してる時に感じてた事を話す。案の定冷や汗の量が増えた。キャスターが観念したのか若干誤魔化すように笑う。

「……てへ、バレてました？」
「もう、ばっちりと」
　キャスターは感情を簡単に表面に出すタイプじゃないのに、私でも分かるぐらいなのだからそれはもう分かりやすいレベルだと思う。
　もしかしたらハクノくんは前にキャスターから聞いた「イケタマ」と言うやつなのかもしれない。
「キャスターはハクノくんのサーヴァントがよかったですか？」
「まさか！確かにハクノさんは好みドストライクのイケタマの持ち主です。きっとどこかで私がハクノさんを旦那様としてゲットしてる世界もあるでしょう。ですが、少なくともこの私は生涯ご主人様の側にいると決めたのです！そんな悲しいコトおっしゃらないでくださいまし！」
　心外だと言わんばかりに訴えるキャスターを見て、私は深く反省する。少し不安になったからってあんな酷い事を聞くのはあんまりだ。
「ごめんなさい、キャスター。私、キャスターがハクノくんと一緒にいたいんじゃないかって不安になって……。だからって、あんな事を聞くのは酷いですよね」
　キャスターはうなだれる私をじっと見てから、何かを決心したかのように私の両手を握る。

「――玉藻の前です」

……。

……へ!?

「そ、それって……」

「ええ、お察しの通り、私の真名でございます」

そんなさらっと!・まさか、真名を今教えてもらえるとは思わなかったから、酷く混乱している。

本当にどうして!・今!?

「あと本当は自分語りは好きではないですけど、真名だけだと誤解されちゃいますし、ついでなので～」と、キャスターの生前の話――いつも軽い態度の彼女のものと思えない、哀しくも愛しい。人間に憧れた、夢見る少女の話をしてくれた。

だから待って。情報量が多いんです……。

混乱する私をいつもみたいに朗らかに笑いながら続ける。

「私も本当はもう少し後で、もっとカッコいいタイミングで名乗る予定だったんですよ？でもご主人様の信頼を勝ち取るには、これが一番手っ取り早いっていうか？ぶっちゃけ、ご主人様いつ目覚めるか分からないから、そんな悠長に構えてる暇ないなっていうか？」

「は、はい」
「まあ、要はご主人様が安心するなら私の真名をかけて宣言するのがいいと思ったのです！」
　真名を教えるタイミングがなかっただけで、隠し続ける理由はなかったですしね！と、満面の笑みでぶっちゃけるキャスターに、私はただ困惑する。真名ってそういうものだっけ？
　キャスターはおもむろにこほん、としてまるで演説するような口調で話し出す。
「ではでは改めまして、私、玉藻の前の名にかけて生涯ご主人様の側にいる事を誓います。……ちょっとプロポーズっぽいですねえ」
　デレッと、締まらない顔で言うものだから、だんだん笑いが込み上げてくる。
　そうだ、キャスターはこういう子だ。
「ふふ、ありがとうキャスター。私、もうキャスターをどんな形でも疑ったりしません」
「ええ……。それは有難いですけど、自分で言うのも何ですけど、あの玉藻の前ですよ？信じきっちゃっていいんですか～？」
　ニマニマとしてちょっと意地悪そうに言うけれど、きっとそれは私が何て返すか分かっているからだと思う。
「はい！どんな事があっても私はキャスターを、玉藻の前を信じます！」

なので飛びっきり笑顔も添える事にした。
少しでも私の気持ちが伝われればいい。
「〜〜っ！もう、もうご主人様好き！あと、どうせならタマモちゃんって呼んでください！なんならアツツイ抱擁付きで！誓いのヴェーゼでも可！ご褒美くださーい！」
「え……、えっと、タマモちゃん？」
流石にヴェーゼは出来ないので、抱擁をする。
「やだ、私のマスター素直すぎ!?」と興奮しながらも、むぎゅうっと抱きしめ返してくれた。
ちなみにこの日は抱きしめたまま寝オチした。
次の日、キャスターは明後日の方を向きながら「生殺しは酷いです……」と言っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

4回戦を終えた直後からだろうか、やけに眠くなるようになった。おまけに夢も見るようになった。見覚えのない男の子が、私に色々と話しかけてくれる夢だ。
……話の内容までは覚えていないけれど。

あれは恐らく……。
５回戦のアリーナ攻略の最中のとある日。
図書室に次の対戦相手の情報のヒントがないか調べる為に向かうと、少し前の方に見知った後ろ姿が見えた。

「こんにちは、ハクノくん」
「こんにちは。栞も図書室で調べものか？」
「はい、ちょっと気になる事があったので。ハクノくんもですか？」
「まあ……。時間潰しの意味合いの方が多いけど」
時間潰し……？
どういう事かと考えるとタマモちゃんから「ハクノさんからサーヴァントの気配がしませんね」と念話がきた。
あまり大きい声で尋ねる内容ではないので、小声で問いかける。
「ハクノくん、今サーヴァントを連れていないんですか……？」
「……そうなんだ。ちょっとトラブルがあって……。今は治してもらっている最中で、その時間潰しなんだ」
小声で話す私につられるようにハクノくんも小声でコソコソと返してくれた。

なるほど。サーヴァントのトラブルは確かに大変だ。
でも、治してもらっているという事は大丈夫なのだろうと安心する。
「治るならよかったです。あ、引き止めてしまってごめんなさい。図書室に入りましょうか」
「いや、全然大丈夫だ。また後で話そう」
図書室では調べる内容が違うので、自然と別れる形になった。
調べものを終え、図書室を出る頃には、ハクノくんも「治ったと連絡がきた！」と、急いで出ていった。
個人的に応援している身としては、ハクノくんのサーヴァントが無事で本当によかったと思う。
……？
今、視界がぶれたような気がした。
眠いのだろうかと、目を擦ろうとした次の瞬間、
「……っ！ご主人さ――」
私は意識を失った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目を覚ますと、膝枕をされてるのか私を心配そうに見下ろすキャスターと目が合った。

起き上がりながら辺りを見回す、どうやらここはマイルームのようだ。キャスターがここまで運んでくれたのだろう。

キャスターには謝らなければならないと、向かい合うように座り直す。

「……ごめんなさい」

私の謝る姿を見て、キャスターは仕方がないなあとでも言うような顔をする。

「ご主人様、私に話してない事があるのではないですか？」

「……。最近、正確には4回戦を終えてからです。――――夢を見るようになりました」

「……夢、ですか」

キャスターが一瞬寂しげな顔をしたのを私は見逃さなかった。

本来、ムーンセルでは夢を見ない。夢の中で夢は見ないからだ。もしかしたら例外はあるかもしれないけれど……。私の場合は恐らく、元の体に戻る前兆のようなものなのだろう。

キャスターも同じ考えなのだろう。

「……ご主人様、おめでとうございます。やっと帰れますよ！今までの頑張りが報われますね！」

明るく祝福してる姿を見て、何とも言えない気持ちになる。だってそれが空元気だと分かっているから。

確かに喜ぶべきなのだろう。元々の目的はそれなのだから。けれど、もう純粋に喜ぶ事が出来ない。

私はキャスターと離れるのが堪らなく寂しくて、悲しい。

「……ご主人様、そんなに悲しまないでください。ご主人様が無事に帰る事が私の願いでもあります。ほら、そちらにも召喚システムがあるのなら、私がご主人様に召喚してもらえるワンチャンあるじゃないですか。そしたらほぼ無期限ラブラブ夫婦生活到来ですよ？あれ、それ最高じゃね？」

ああ、確かにそうだ。あっちにも召喚する術はある。私にさせてもらえるかは分からない。けど、どうにかして必ずキャスターを召喚しよう。こんな私にずっと寄り添って、戦ってくれた彼女を。

「……キャスター。私、絶対キャスターを召喚してみせます。絶対、絶対に迎えに行くから……」

「はい、むしろ私が迎えに行く勢いで行きますとも！……なので、今は帰ってしまうその

時まで、どうかタマモを貴方のお側に」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

5回戦を終えた次の日。

私はあれから、眠る頻度が多くなった。今回の5回戦だって下手したら参加出来ないのではないかと不安になるぐらいに。……もう、限界なのだろう。

ふらふらしながら歩くが、遂には壁に凭れて座り込む。

キャスターが霊体化をといて、支えるように座る。

「……栞？」

前の方から声がする。

緩やかに顔を上げると、ハクノくんとサーヴァントが驚いたようにこちらを見ていた。

一瞬間を置くと、急いでこちらに駆け寄って来てくれた。

「栞！大丈夫か？どこか体調が……っ！透けてる……？」

「これは一体どういう事だ！説明せよっ！」

二人が混乱しながらも、心配してくれるのがよく分かる。――本当に優しい人達だな

あ。

「……初めて会った時、私には目的があるって話しましたよね？」

「あ、ああ。……今の状況が、その目的に関係しているのか？」

「はい、私、ずっと元の場所に帰りたかったんです。ここじゃない、私の本当の居場所に」

「帰りたい？」

ハクノくんは困惑した顔をする。それもそうだろうと思う。ここに来る人の殆どは自ら望んで来た人ばかりなのだから。

私は辿々しく、自分の経緯を話す。その間にも、私の体はどんどん透けていく。ああ……、もう時間がない。

「ハクノくん、手を……」

手を伸ばせば、ハクノくんは慌てて握ってくれた。

「私、ハクノくんに会えてよかったです。気軽に話が出来る人、本当にいなかったから……。楽しかったです」

「俺も、楽しかった」

「ふふ、ありがとうございます。……出来る事なら貴方と友達になりたかった」

本当にそれだけが心残りだ。勇気を出して言えばよかった。

キャスターの方を向く。彼女の泣きそうな顔に申し訳なさを感じる。けど、私が今言

うべき言葉は謝罪ではない。
「キャスター、今まで、本当にありがとう。約束……必ず守ります」
「はい、はい！ずっと、お待ちしております」
泣きそうになりながらも笑ってくれるキャスターに、私も笑い返す。
もう時間切れだ。瞼が重い。
私はそっと、目を閉じる。

こうして私の月の夢は覚めるのであった。

# 1部4章
# 目覚めと記録

目を開けると知らない男の子が驚きと喜びが混じったような顔で覗き込んでいた。
「……だれ？」
思わず声に出す。私の声は随分と掠れていた事に密かに驚く。
男の子は私の声を聞くとハッとした様な顔になり、慌て出す。
「ド、ドクター！ドクター!!栞さんが起きた!!」
男の子は興奮したまま部屋を飛び出し、大声でドクターを呼びに行った。
今まで何だか長い夢を見ていたような気がする。具体的には月の海みたいな……。
長い事眠っていたせいか、全然関係ない事を思考していた。
暫くして、男の子とドクターが慌てて部屋に入って来た。
「ああ、栞ちゃん！よかった、目が覚めたんだね！」
ドクターは涙目になりながら喜んでくれた。
そこからは怒涛の勢いで、ドクターを含めた何人かの医療スタッフの人達が私の細かなバイタルの確認等を行った。

今は一段落して、検査結果が出るまで休憩を貰える事になった。
「いやー、でも本当によかった。このまま起きないじゃないかってハラハラしてたよ」
ドクターのほわほわとした雰囲気に、私も何だかほわほわとした気持ちになる。ドクターのこういう所は本当に素敵だと思う。
２人で和やかにお茶をしていたら「ドクター！今、入ってもいいですか！」と、元気な声が聞こえてきた。
聞き覚えのあるそれは、恐らくあの男の子の声だろう。
ドクターも軽く「どうぞー」と返すと、ドアが開き入ってくる。男の子１人だけかと思ったら、もう１人いたようだ。そちらは何度か話した事がある、キリエライトさんだった。
２人仲良く私とドクターの前に並んで、背筋をピンと伸ばしている。何だか緊張しているようだ。
「あ、あの！今時間があるなら自己紹介したくて！」
「わ、わたしも、お互い知っている身ですが、改めて挨拶をしたいと思いまして！」
確かに自己紹介は大切だ。私はすぐに了承して、自己紹介を始めた。
男の子の名前は藤丸立香と言うらしい。
「藤丸くん、キリエライトさん。これからよろしくお願いします」

「あの、栞さん。俺、出来たら名前で呼んで欲しいな」
「ダメ？」と首を傾げる姿は、なんとなく可愛らしく見えた。断る理由もないので、提案に頷く。藤丸……、立香くんはとても嬉しそうに笑った。名前１つでここまで喜ぶなんて、純粋な子だなあ。
「栞さん！さっそく呼んで！」
「立香くん、でいいですかね？私もさん付けじゃなくていいですよ」
私のその言葉に、ますます嬉しそうに笑うのだから不思議だ。
私と立香くんの様子を見ていたキリエライトさんも「わたしも！わたしも是非名前で呼んでください！」と挙手して、頬を赤らめながら言った。それはもちろん構わないのだが、彼女はこんなにも感情豊かな少女だっただろうか？
「あの、マシュ。失礼な事を聞きますけど、そんなに明るい子でしたっけ？」
私の記憶の中の彼女はどことなく、人形染みた感じがしたのだけど……。
マシュは首を傾げながら「わたしは変わりないと思いますが」と言った。それに同調する様に、立香くんも「マシュとは、会った時からこんな感じですよ？」と言っているので、もしかしたら私の記憶違いなのかもしれない。
「でも、よかったですね。人類最後のマスターである先輩以外に、マスター候補である栞さんが目覚めた事は戦力的にもとても良い事ですし」

「人類最後……？」
マシュの言葉に疑問を覚える。立香くんが人類最後のマスターとはどういう事だろうか。他のマスター候補の人達は、Ａチームの人達は、――ゼムルプスくんはどうなってしまっているのか。
どういう事かとドクターの方を向くと、「しまった」とでも言うように慌てていた。
「あー……、マシュ？実はその話まだしてなくて、ね……」
「え？――え！」
マシュはそこで自分が何を言ってしまったか気づき、可哀想なくらい顔を青ざめ両手で口を覆う。きっと私も同じぐらい青ざめていると思う。
立香くんがマシュと私を交互に見て「とりあえずマシュを落ち着かせてくる」とマシュを連れて部屋を出た。
「……あの、栞ちゃん？マシュも悪気があった訳じゃ」
「はい、分かっています。ドクター、今のカルデアの状況、教えてください」
ドクターは躊躇う様子を見せたが、少しして状況を説明してくれた。レフ教授の裏切り、何者かによる人理焼却、マスター候補達の凍結保存、マリーの死……。挙げれば切りがないくらい、色々な事が起こっていた。
ドクターは「ちょっと待ってて」と、部屋を出ていく。

少しすると、タブレットを持って戻ってきた。
「栞ちゃん、よかったら今までの記録見るかい？」
「……いいんですか？」
「もちろん」と頷きながら、渡してくれたので受け取る。ドクターは「見終わった頃にまた来るね」と、部屋から立ち去った。
私は手に持ったタブレットの電源を入れ、映像記録のファイルを開く。
オルレアンの聖処女とフランスを駆け抜ける姿。
薔薇の皇帝とローマを駆け抜ける姿。
太陽を沈めた海賊と海を駆け抜ける姿。
どれもが1つの物語なのではないかと、思ってしまうぐらい彼らの旅は壮大だった。
とても現実とは思えない旅を、彼らは実際に歩んだのだ。
……私はこれからこんな凄い旅に行かなければいけないのか。
あの事故が起こる前に心配していた事が現実になるなんて。何も覚悟できていないのに。
1人で後ろ向きな思考をしていると、扉からノックの音がした。ドクターが来たのだろうか。
「……どうぞ」

「あ、記録全部見終えた？終わったら召喚部屋に連れてきてって言われたんだ」
部屋に入って来たのはドクターではなく、立香くんだった。とてもあんな戦いから勝ち抜いて来たとは思えないほど普通に見える。
「……凄い」
つい思った事が口に出る。立香くんにもしっかり聞こえてたみたいで「えっ」と驚いた顔で見つめてくる。
「あ、その……あんなに戦って、頑張って凄いなーって……。す、すみません」
自分でも何を言ってるか分からないような言い訳をしていると、急に立香くんに手を握られる。驚いて顔を見るとキラキラとした喜びを全面に出したような顔をしていた。
「俺の事、褒めてくれてるんだよね？……嬉しい。俺、凄く嬉しいよ！」
私が褒める事で、何故こんなにも喜んでくれるのかは分からないけど、彼が嬉しいならそれでいいのかもしれない。
そろそろ召喚部屋に行きませんかと伝えれば、部屋に来た目的を思い出したのか「そうだった……」と、少し照れながら召喚部屋に連れていってくれた。
召喚部屋に向かう最中、立香くんと話して少し忘れかけてたが、自分に戦えるか分からない不安が大きくなっていた。
本当は戦いたくないけど、そんな我が儘が言えるほどここに余裕はない。

立香くんだって頑張っているのだから、自分も頑張らないと……。
でももし、もし誰も召喚に応じてくれなかったら……。
そんな事ばかり考えてるうちに部屋に着いてしまった。
部屋に入るとドクターやダヴィンチちゃん、マシュが待っていた。
「あ、来たね。君が目覚めて本当によかったよ。本当はもっと話したいところなんだけど、今は召喚が先だからね。はい、これ呼符。君の為に用意したんだ。ぜひ、使ってくれたまえ」
久しぶりに会うダヴィンチちゃんから呼符を受け取る。そのまま本に挟んでも問題無さそうな見た目だ。
「よし。じゃあ、その呼符をそこの装置に置いて。……うん、それじゃあ作動させるよ！」
装置が作動してサークルが青く輝き出す。輝きはどんどん増していき、慣れない光の強さに思わず目を瞑り顔を背ける。
光が収まった頃、目を開けると立香くん達が唖然とした顔をしていた。慌ててサークルの方に目を向けると私は愕然とした。
そこには――誰も何もいなかったのだ。

# 猫のご飯とお散歩計画

――結局、召喚は失敗に終わった。

あれから何度か挑戦はしたものの、結果は変わらなかった。マスター適性がなくなったのではと、検査をしたがマスター適性は以前と変わらない数値が出ていた。ドクターは「召喚の失敗の原因は分からないけどマスター適性がなくなったという、最悪の事態にならなくてよかった」と慰めてくれた。

翌日の朝。

召喚の失敗がよほどショックだったのか、眠りが浅くいつもの起床時間より大分早く起きてしまった。

特にする事もなく、ぼーっとしていたら扉からノックの音がした。相手は私がまだ寝ていると思ったのか小さめの声で「失礼します」と言って入って来た。相手はマシュだった。

「あ、起きてたんですね。おはようございます、栞さん」

「おはようございます、マシュ。こんな朝早くからどうしたんですか?」

マシュは言うべき言葉を探しているのか、口をもごもごさせていた。しばらくマシュを見守っていると、キリッとした顔で私の近くまで来て床に座り、頭頂部がキレイに見えるぐらいに頭を下げた。所謂土下座だった。

「先日の失言、申し訳ありませんでした！」

「……え!?マ、マシュ頭を上げてください！そんなに気にしないで！」

急いで床に膝をつき、マシュの頭を半ば無理矢理上げる。顔を見れば泣きそうな顔だった。

まさかマシュがここまで気に病んでいたとは思わなかった。だってマシュは何も悪くない。私がドクターから今のカルデアの状況を聞いたか知らなかったのだから。――ただタイミングが悪かっただけなのだ。

その旨を伝えるが、納得がいかないのかマシュが私の両肩をすがり付くように掴む。

「わたし、栞さんにどうしても謝りたくて……。なぜだか怖いんです。栞さんに嫌われるのが……。お願いです。嫌わないでください……」

「嫌いません。嫌いませんから。そんな事でマシュを嫌いになるわけないじゃないですか」

そう言いながら落ち着かせようとマシュの腕を擦る。少し落ち着いたのか、マシュはだんだん手の力を緩める。

何故彼女が私に嫌われる事をここまで恐れているのか分からない。私が眠っている間に何があったのだろうか。

なんとなくそれを今聞くのはいけない気がして、また機会に聞く事に決めた。

マシュも大分落ち着いたようで「重ね重ね迷惑をかけてすみません……」と恥ずかしそうに謝った。

ちなみに何故土下座をしたのか聞いたら、どうやら立香くんが原因だった。マシュが最上級の謝罪は何かと聞いたら「やっぱり土下座じゃないかな?」と言われたらしい。……まあ、立香くんもまさかマシュがそれを実行するとは考えないで答えたのだと思うけど。

マシュが時計を確認すると慌てたように立ち上がる。

「す、すみません。これからブリーフィングがあるので、そろそろ先輩を起こしてきます」

「いえ、忙しいのにわざわざありがとうございます」

部屋から出る前にもう一度こちらに振り向きペコリと頭を軽く下げてから、慌ただしく立香くんの部屋へと向かう姿を見送る。

……それにしてもマシュの私へのあの態度は少し疑問を覚える。彼女は私に対して執着を覚えるような要素はないはずだ。しばらく考えても答えなんて出るはずもなく。

時計を見れば少し遅い朝ごはんの時間帯だった。
そろそろいい時間だしご飯でも食べに行こう。
マシュへの疑問は一旦置いておく事に決めた私は軽く身支度を整え食堂へと向かう。
食堂を覗くと英霊達が何人かいるみたいだ。販売機で適当な食券を買う。調理は料理が得意な英霊がしているらしく、それがまたとんでもなく美味しいとドクターから聞いていたので少し楽しみだ。
わくわくしながらカウンターに食券を置く、のとほぼ同時にモフモフとした猫の手のようなものが私の手を押さえる。押さえてくる相手を見ると猫？狐？耳のメイドさんがまじまじと私を見ている。……なんだか凄く既視感が。見覚えがあるというかつい最近まで一緒に過ごした関係だった相手に似ているような気がするというか。
「……おまえ、『ご主人様』か？」
「――え、あ……タ、タマモ……？」
「ご主人様」この言葉で思い出すのはあの月の出来事。何故忘れていたのだろう。私にとっては夢だったから？思い出したのもタマモに関する事だけだ。わからない……、わからないけどキャスターによく似た彼女の発言から、あの夢は現実だったのだと思えた。
キャスター本人ではないとわかっていても胸の昂りを抑えられそうにない。目の前

の彼女は私の反応を見て「ふむふむ」と考える仕草を見せてから、押さえてた手を離し、食券を受け取る。
「注文でキャットのお得意のオムライスを頼むとはお目が高い！しばし席で待つがよい」
　そう言うとルンルンとしながら奥へと行ってしまった。仕方がないので言われた通り席に座って待つ事にする。少しすると前の席に誰かが座る。性別がどちらかよく分からない不思議な人が品定めをするようにこちらを見つめていた。
「ほぉ……、其方がもう1人のマスターか」
「……いちおう、そうなります。召喚は失敗に終わったのでマスターと名乗っていいか、わかりませんけど」
「ふむ、それは立香から聞いておるぞ。まあ、パッと見たところ召喚が失敗した原因はそなたの心の問題のようだがな」
「私の、心……？」
　失敗の原因が私の心の問題とはどういう事なのだろうか。目の前の人は納得したような顔をしているが、私には全然わからない。
「あの、ところでお名前をお聞きしても？私は」
「雪白栞、であろう？」

名前を言い当てられた事に少し驚く。いったいどこで知ったのか。もしかしたら他の人から聞いただけなのかも知れないけれど。

「朕は始皇帝である。……まあ何だ、其方の疑問に答えるなら単純に立香から聞いただけだ。立香が初めて召喚したサーヴァントが何を隠そうこの朕でな、其方の次に何かと報告しに来るのだ」

そういえば記録で見たかもしれない。始皇帝……初めてが始皇帝……。やっぱり立香くんって凄い。立香くんからの報告なんて聞いたことないから何の事かはわからないけど、何で名前を知っていたのかはわかったので、これ以上聞くのはやめておこう。

「ところで其方はレイシフトの方は出来るのか？」

「えっと、数値に問題はなかったので、たぶん出来ます」

「そうかそうか！いや、朕も暇でな？そもそも其方に話し掛けたのは共にレイシフトして欲しいからなのだ。立香は今朝から倫敦（ロンドン）の特異点の修正に出向いた為、行けなくてな。出来るならサーヴァントをあと2人程誘いたいところだな……」

何故か私もレイシフトする事が決定されてしまった。……行くなんて言ってないのに。それに、たぶん出来ると言ったのであって、本当に出来るか分からないのに。始皇帝さんは意気揚々と計画を進めている。早く止めないと……。

「あの、私はレイシフトには行きません」

「ふむ、何故だ？これは其方にとっても悪い話ではなかろう」
「……どうしてですか？」
「そなたの心の問題を解決する為の一歩になるからだ」
……。そんな事……、そんな事言われたら断れるわけがない。私は押し黙る事しか出来ない。
私の反応を肯定と見たのか、再度「あと2人だな」と辺りを見回す。
「オムライスお待ちどうさまだワン！」
ゴトンと目の前とその隣に美味しそうなオムライスが置かれる。2つある事に首を傾げていると、タマモキャットはオムライスを置いた私の隣の席へと座る。
「チーフより早めに仕事の休みをもらってきたのでな。これでご主人様とゆっくり話が出来るというコトだ」
「……タマモキャットか、悪くないな。おい、この後空いておるか。空いておろう。よし、そなたも参加だ」
「うん、何の話かサッパリなのだな」
強制参加させようとする始皇帝さんに若干呆れつつ、私は話が見えていないタマモキャットにレイシフトの話をする。
「ふむ、レイシフトか。それはご主人様も行くのか？」

「はい、私も行きますよ」
「……先程から栞を主と呼んでいるが其方のマスターは立香であろう?それとも栞に鞍替えしたのか?」
始皇帝さんの疑問は最もだ。タマモキャットの「ご主人」と「ご主人様」の違いが分かるのはこのカルデア内では私しかいないのだろうし。傍から聞いたらタマモキャットのマスターが私になったように思えるだろう。
「我を甘く見てもらっては困るワンッ!ご主人様は確かに大切な存在であるが、今はご主人一筋……。あくまでタマモキャットのマスターはご主人である。それはそれとしてもちろん我もご主人様についていくぞ!」
「ご主人様との散歩は初めてだから楽しみだ!」と元気よく言うタマモキャットに笑みが溢れる。例えマスターでなくても私を大切な存在だと言ってくれるのが凄く嬉しい。
「だが、報酬はいただこう」
「ふむ、申してみよ」
「ニンジン、それとオリジナルが来たら伝えるのだ……。ご主人様の初めてはオリジナルでも他のナインでもない、このタマモキャットだとな!!」
「ええ……」
よく分からない単語が飛び交っているけど、オリジナルとは恐らく玉藻の事だろう。

他のナインは分からないので後で聞こう。
「オリジナルか他のナインが来たら伝えれば良いのだな。よかろう、それは栞の口から言わせよう。なんか面白そうだからな！」
「ええ、そんな……。わ、わかりました」
なんかもう断るのも面倒になってきた。玉藻には早く会いたいけど、そんなに早く会えるわけでもないし問題ないだろう。
……いつになったらタマモキャットと話が出来るのだろうか。楽しそうに計画を進める2人をよそ目にオムライスを口にする。
「……美味しい」

# 物語が進む傍らで

始皇帝さんの暴走は止まらず「あと1人いれば十二分なんだがなあ」と辺りを見渡しながら大きめの声で言った。キッチンにいた英霊が1人こちらに向かおうとしていたが、私の後ろに目を向けるとやれやれと言いながら、元いた場所に踵返していた。

「それならば余が行こう!」

後ろからの声に驚き振り向くと、薔薇のように可憐な少女が胸を張って立っていた。こちらの少女も見た事がある気がするのだが、玉藻のように思い出せない。たぶん、月関連ではあるとは思うけど。

「おお、其方は羅馬(ローマ)の皇帝ではないか。うむ、これで人数は揃ったな。では、管制室へと向かうか」

始皇帝さんはご機嫌な様子で管制室の方へと歩き始めた。タマモキャットは嬉しそうに笑いながら進んで行く。私も少し離れた位置から付いて行くように歩くとローマの皇帝さんが並ぶように歩き話し掛けてきた。

「貴様、名はなんと言うのだ?余はローマの第5代皇帝にしてオリンピアの華、ネロ・ク

ラウディウスである。ここで皇帝は山程いるからな、特別にネロと呼んでもよいぞ」
　ネロさんのどやっ！とした態度がとても可愛らしく見える。それだけ魅力的な人なのだと思う。
「雪白栞です。よろしくお願いします、ネロさん」
「うむ、よろしくな！――それはそうと、そなた余とどこかで会ったか？妙に既視感が……」
「私も会ったような気がするんですけど、思い出せなくて……」
「そうか……。まあ、思い出せないものは仕方あるまい！もしかしたらそのうち思い出すやもしれんしな！」
　私が感じていた既視感はネロさんも感じていたようだ。会うとしたら月しか心当たりがないから、きっとそこで何かしらの形で会ったのだと思う。
　そうこう話している内に管制室に着いてしまった。意気揚々に入る始皇帝さんに何人かのスタッフが少し驚いている。スタッフから知らされたのかドクターが慌てた様子で私の方に来た。
「栞ちゃん、どうしたんだい？こんな所まで……」
「あー、そのですね……」
　レイシフトさせて欲しい話をドクターにすれば困ったというか焦っているというか、

とにかく「まずい」という顔なのはわかった。
「その、確かに数値的に栞ちゃんのレイシフトは問題ないはずだけど、その……」
「ふむ、何故渋る？暇潰しが主な理由とは言え朕自ら物資調達（素材回収）に行くと言っているのだ。感涙に咽ぶ理由はあれど渋る理由はなかろう」
「いや、でもですねぇ……」
ドクターがやけに渋る様子に少し不思議に思う。ダメな理由があればはっきりと断る筈なのに、やけに煮え切らない態度をとるばかりだ。何か理由があるのだろうか。
始皇帝さんはその理由に思い至ったのか若干呆れた顔をした。
「……よもや立香に止められてるとか言うのではあるまいな？」
「うぐッ！……その通りです。現在サーヴァントと契約していない栞ちゃんを危険な目にあわせたくないから、何があってもレイシフトさせないでほしいと。それはもう言葉で言い表せない顔でね……」
「あれは怖かった……」と明後日の方向を見るドクターに立香くんがどんな顔をしていたのか気になった。だからといって見たいとは思わないけど。
「その、なんとかレイシフトさせてもらえませんか？物資調達は必要ですよね？私、少しでも皆さんのお役に立ちたいんです」
「ん、んー……。確かに物資調達は助かるんだよなぁ」

しばらく考えた後、ドクターは1人のスタッフに話しかける。
「ムニエルくん、今からもう1つのレイシフトに人数を割く事は出来るかい？」
「……まあ、リツカの方は今のところ安定してるので数人ぐらいなら」
「――よし！じゃあオルレアンに座標を合わせてくれ。レイシフトの準備をする」
レイシフトの許可が下りた事にホッとする。私の問題が解決する糸口があるならどうしても行きたかったから本当によかった。
「……いいかい？立香くんには絶対内緒だからね？本当にこの件は黙っててね！？」
「ドクター、わかりましたって」
ドクターの念の押しように苦笑しながらコフィンに入る。初めてのレイシフトに酷く緊張する、適性の数値に問題ないとはいえ、もし失敗したらという不安がない訳じゃない。1度深呼吸をして、目を閉じて心を落ち着かせる。スタッフの人達を信じる事しか今は出来ないけど、きっと大丈夫。
スタッフの声が聞こえる。
「――――レイシフト開始します！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どこまでも広がる草原、青空は――――残念ながら例の光帯で澄んだ空とは表現が出来ない。魔術師として落ちこぼれである私でもあの光帯の異常なまでの魔力量を感じる事が出来る。……もしかしたら私みたいなレベルの魔術師だからこの程度の感想で済んでるのかもしれない。上位の魔術師なら絶望に値する何かを感じていたのではなかろうか。

景色を見て現実逃避していたけど、そろそろ現実を見なければいけない。暇潰し兼物資調達の方は今どうしているかと言うと……。

「はっはっはっ！平伏すが良いぞ」

「殴ッ血ＫＩＬＬ（ブッちぎる）!!」

「余は楽しい！」

もはやただの蹂躙だと思う。

現在は戦闘も一段落した為、昼食を兼ねた休憩中である。朝も食べたけれど、タマモキャットのオムライスはやっぱり美味しい。

戦闘の感想としては、こう、何というか――個性の殴り合いだったというか、個性の闇鍋パーティーだったというか。とにかく凄まじかったとしか言えない。

ゲームでいうならラスボスに勝てるぐらい高レベルの勇者が始まりの町でひたすらスライムを倒し続けるような光景だった。

……なんだか自分が戦ったわけでもないのに凄く疲れた気がする。

「まともに指示する暇がなかった……」

「む、そうでもなかったぞ？確かに集団戦の指示はまだ拙いが個々の戦いにおいては初心者にしてはなかなかであった。まともな指示を期待してなかっただけに朕も驚いたぞ」

それは月でのアリーナ攻略の経験を思い出したからなのだと思う。あちらでは主に個人戦しかしてこなかったので、集団戦とか慣れてないのだ。

それにまともに指示出来なかったのは本当なのだ。だって戦闘開始早々に宝具を使いまくり、集めたクリティカルスターでトドメを刺すだけの流れ作業とも言える戦いにどう指示しろと言うのか。

「……これ、いつ切り上げるんですか？」

「そうさな、夕餉には帰るか」

「今お昼過ぎたばかりだがらまだまだじゃないですか……」

終わりが見えない事に軽く絶望してしまった。

立香くんもいつもこんな感じなのかな。世界を救う為の特異点修復の他にこんな重

労働なんて……。彼はいつか過労で倒れてしまうのでは……。
「其方の心配には及ばぬ。何故なら、今回其方がこういった戦闘に慣れていけば立香と其方で負担を半分に出来るのだからな」
「はっはっはっ、せいぜい励むが良い！」と激励の言葉を言い渡し、私の傍から離れていった。
始皇帝さんは暇潰しとか言っていたけど、立香くんの負担を減らす為に私を戦闘に慣れさせようとしてくれたのかな。立香くんは大切にされてるなぁ……。
「ご主人様、今いいか？」
「いいですよ。キャットとは色々話したかったので」
「うむ、アタシもだ！」
ニコッと元気に笑うタマモキャットが可愛くてなんだかほわっとする。食堂の件でタマモキャットにはずっと聞きたい事があるのだ。何故なら私には「オリジナル」も「タマモナイン」もさっぱり分からないからだ。いや、オリジナルはなんとなく察せるけど、1番はタマモナインというちょっと耳を疑う単語が出来上がった経緯が聞きたい。
「……その、タマモナインってどういう経緯で出来たんですか？」
「うん……ある日オリジナルが『やだ、私ったらちょっと霊基（ウェイト）が増えちゃったかもー★』というなんとも頭の悪い理由だな！」

思わず頭を抱える。なんて頭の痛い理由。あの巫女狐はそんな軽いノリで分離したのですか、そうですか……。いやまあ、らしいと言えばらしいけども。……らしいけども！でもやっぱりこう、やっちゃいけない事ってあると思うんです！

「……ご主人様はタマモナインが出来た事に不満があるのか？」

「あ、いえ……別にそこまでは……」

「ならば安心するのだ。何故ならキャットが他のナインは殺すからな！最終的にキャット1人が残るぞ！」

「それもそれでどうなんですかねぇ！」

もっと穏便に済む方法がよかった。

……まあ、タマモナイン誕生の理由が知れてよかったと思おう。オリジナルである玉藻に聞いたらたぶんだけど、ちょっといい感じに言って誤魔化す気がするから。代償で頭が痛くなったけど。

「栞、キャット！そろそろ素材回収再開するぞ！」

「あ、はい！すぐ行きます！」

「戦闘再開だな。むっふっふ～玉藻地獄の見放題であるぞ？」

いつの間にか休憩の時間が終わっていたのか、ネロさんが呼びに来てくれた。タマモキャットは元気よく、1人で敵が現れやすい所まで走って行った。慌てて追いかけよう

としたら、後ろからくいっと服の裾を引っ張られた。今この場に居るのは私とネロさんなので、誰が引っ張ったのかはすぐにわかった。ただ何故そういった行動をするのか分からず一瞬思考が停止してしまった。

「……ネロさん、どうかしましたか？」

「その、だな……。余は褒められれば褒められるだけ伸びるタイプなのだ」

「はい」

「いつもは戦闘が終わるとすぐにマスターが褒めてくれる」

「……はい」

「――つまりだなっ！栞も余を褒めるのだ！余に優しくしろ！頭を撫でるのだ！もっと構うのだ～！」

不満の爆発しているネロさんが頭をぐいぐい押し付けながら訴えてくる。

えっと、つまり頭を撫でて褒めろという事なのだろうか？皇帝に対する態度ではない気がするけど、本人の希望だし……。

私は恐る恐るネロさんの頭に手を置き、ぎこちなく撫でていく。皇帝にこんな事するのに緊張しないわけがない。けど、撫でられるネロさんの気持ち良さそうに目を細める顔がなんだか可愛くてなかなか止める事も出来ない。さすがに始皇帝さんとキャットをこれ以上待たせるわけにもいかないので、撫で続けたい気持ちを抑えて撫でるのをや

めた。
　ネロさんはまた少しむすっとしている。まだ撫で足りないのだろうか。
「……栞、褒め言葉がないぞ」
「あっ……！えっと、ネロさんの戦う姿は薔薇みたいに華やかでとても素敵です」
「うむうむ、そうであろう！芸術のように美しく！薔薇のように華やかで！炎のように激しい！余の戦いっぷりをその目に焼きつくすのだ!!」
「その為にも早く向かわねば！」とネロさんは私の手を引き走り出す。サーヴァントだからもっと早く行けるだろうに、私が転ばないようにとゆっくり走ってくれる気遣いに嬉しく思う。
　――こうやってサーヴァント達と過ごす日々も悪くないのかもしれない。
　暖かな想いを感じながら、私は戦うことへの勇気が少し湧いたような気がしたのだ。
　まあ、そんな思いも第二次宝具合戦で少し考え直したくなるのだけど。私はため息を吐きながらサポートに専念するのであった。

# 藤丸立香は守りたい

あの日からほぼ毎日物資調達という名の私の戦闘訓練が行われた。さすがに毎回タマモキャットを連れて行けないのでどうしようかと思ったが、エミヤさんと頼光さんを含めた3人がそれぞれ交代で参加するという事で解決した。

エミヤさんは皮肉めいた口調が目立つが、物資調達初日の人数集めの時に参加してくれようとしていた姿を知っていたので、根は優しい人と分かっていたから特に気にならなかった。面倒見もいいのか、よく私に戦闘時のサポートのアドバイスをしてくれる。まさに頼れる優しいお兄さんのような人だ。

頼光さんは優しく微笑む姿が印象的な人だ。狂化のせいかマスターである立香くんを我が子と認識しているようだけど、基本的にはいい人なんだと思う。戦闘においてはこれ以上ないぐらい頼りになるとても強い人。だけど、その、ちょっと不思議な行動にたじろいでしまう事もある。

あれは初めて頼光さんが参加した日の事だった。

軽く挨拶をしてから握手をすると、いきなり頼光さんが私の手を自分の方へと引き寄せた。突然の事だったので私はそのまま頼光さんの体に寄りかかる体勢になってし

まった。
「ふふっ、あなたはとても良い匂いがしますね」
「甘い匂いです」と私の首筋に鼻を近づけて頼光さんは言った。同性とはいえ美女の顔が間近にあるのは凄く心臓に悪い。ドキドキする。
「ああ、本当に甘い。匂いだけで酔ってしまいそう……
。――――あの虫が好みそうな香りです」
「ひぇっ……」
　さっきまで甘い声だったのに、急に殺意を含む低い声に変わったのに驚き、体が震える。怖くてとてもじゃないが顔を見る事が出来ない。数秒前と違う意味で心臓がドキドキしてる。
　私の震える姿に見かねたネロさんが止めてくれる。
「おい頼光、いい加減殺気を収めよ。栞が怯えているではないか」
「……ああ、すみませんつい……。栞さんもすいません。でもいいですか栞さん、虫……いえ鬼の類いには気をつけてください。恐らく栞さんの匂いはあの虫が好む香りです。まあ、我が子の大切な友人である栞さんに近寄ろうものなら私が即刻首を切り落としますが。」
「はぁ……」

殺意が収まった事への安堵と突然のよく分からない忠告に生返事しか出来ない。私、どんな匂いしてるんだろう。

「大体そんなに臭うか？香水にしては、些か薄くもあるが……淑女が嗜む程度の甘い香りではないか」

「薄い？むしろ強めだと思いますが」

ネロさんも同じ事を思ったのか頼光さんに聞いていた。けどネロさんの言葉にも首を傾げる。だって私は香水使っていない、というか持っていない。２人の言う匂いがさっぱり分からない。

「それは香水ではなく、栞の魔力の匂いであろう」

今まで静観していた始皇帝さんが口を開く。私の匂いの正体を知っているように答えた。

「む、魔力か？魔力に匂いがあるなど、余は聞いた事がないぞ」

「何事にも例外はあろうよ。感じる匂いの強弱については朕も知らんがな。まあ、何かしらの条件でもあるのだろう」

「ちなみに朕も薄く感じる程度だ」とさして興味無さそうに言った。そして「今日は海に行くぞ！獲れたての魚介でバーベキューだ！」と始皇帝さんが言い出したので、結局この話はそのままうやむやに終わった。

この日カルデアに戻ってから何人かのサーヴァントに匂いについて聞いた。ダヴィンチちゃんとエミヤさんは「全く分からない」、ブーディカさんは「薄く感じる程度」との事だった。タマモキャットからは「いつも通り美味しそうな匂い、食堂に入って来たらすぐにわかる」と少し分かりにくい解答なのでなんとも言えない。結局香りを感じる条件は分からずじまいである。

この数日間本当に英霊達と一緒にいて楽しいと感じた。始皇帝さんがレイシフトに連れ出されなかったら、まだうじうじと部屋に引きこもっていたかも知れない。あの人には本当に感謝ししてもしきれない。

だからとは言わないけれど、私は初日にドクターが話していた事を忘れていたのだ。気を付けなさいって毎回言われていたのにいつも大丈夫だからって安心しきっていたのだろう。慢心していい事なんて普通はないと分かっているのに。

「――――何、してるの？」

そこには立香くんが信じられないものを見るような目でこちらを見ていた。今まで見た事がない感情が全て消えてしまったのではと思ってしまうぐらい、今の彼には表情がなかった。

背中に冷や汗が流れる。どうして彼がここにいるのだろうか。だってまだ修復は終わってないはずなのに……。

立香くんは表情が変わらないまま私に近寄る。その間誰も動けなかった。
「ねぇ、何してるのって聞いてるんだけど」
「あの、これは」
「なんで栞がレイシフトしてるんだよっ!!!」
立香くんの怒鳴り声に足がすくむ。彼は今、本気で怒っている。マシュも立香くんの怒りに驚いて動きが止まったままだ。周りのスタッフ達も立香くんがここまで怒るとは思わなかったからか、酷く動揺している様子だった。
立香くんは私の両肩に手を置く、恐る恐る顔を見れば泣きそうな顔をしていた。その顔を見て、ようやく気付いたのだ。立香くんは本気で私を心配しているのだと。
「栞は今サーヴァントと契約出来てないんだよ!?何かあったらどうするんだよ!」
「ご、ごめんなさい。でも、私……」
――――少しでも立香くんの助けになりたくて。
口に出そうになった言葉を飲み込む。こんな事言えるわけがない。私の勝手な思いを立香くんに押し付けたくない。
黙り込む私の言葉の続きを聞く為か立香くんも黙った。肩に置く手はだんだん力がはいってきてるせいで痛く感じる。そっと私の背後から立香くんの手を覆うように被せる人物が来た。

「これこれ、そのぐらいにせぬか。少し冷静になって栞の姿を見よ。可哀想な程震えているぞ?」
「……あっ」
「栞に執着していたのは知っていたが、よもやここまでとはなぁ。元はと言えば朕が栞を連れ出したのだ。もうこれ以上責めてやるな」
始皇帝さんが話ながら立香くんの手を優しく離させた。
そして立香くんに諭すように語り続ける。
「其方はいささか過保護が過ぎる。栞もじきに特異点での戦いに赴かねばならないのだ。今のうちに慣れさせるのが栞の為でもあろう。事実今まで問題なくこなしているぞ」
「……へぇ、今回が初めてじゃないんだぁ」
ただ一言余計だった。
なぜ何度も行っている事を自分から話してしまったのか。始皇帝さんも言ってから気付いたのか「しまった、失言した」と呟いていた。気付くの遅いです。
また怒らせてしまったかとハラハラしながら立香くんを見たが、当の本人はしばらく私を見てから大きなため息を吐いた。そして仕方ない子を見るような顔で話す。
「……ちょっと怒り過ぎたね。とりあえず俺の部屋で話そうか。……大丈夫、もうあん

な風に怒ったりしないから」
「他のみんなも驚かせてごめんなさい！」と言う立香くんは、その時にはもういつものように元気よく笑っていた。

立香くんは私の手を握って立香くんのマイルームへと歩いた。お互い無言だったから少し気まずい。部屋に着いてからは優しげな顔で私の方を向き、椅子に座るように告げた。言われた通り椅子に座って待つと、立香くんはお茶の用意をしてから向かいの椅子に座った。
「まずは何から話そうかな……。うん、とりあえずあの時何を言いかけたのか聞きたいな」
「それは、……言いたく、ないです」
「どうして？」
「だって、私の勝手な思いを立香くんに押し付けるだけだから……」
膝に置いている手を強く握る。これ以上私と仲良くしてくれている立香くんを失望させたくないから。
「――それでもいいよ」
「え？」

「それでもいいから、話してごらん」
　立香くんは優しく微笑んでいた。「友達に遠慮なんかいらないよ」と言う立香くんに私は躊躇いながら少しずつ話し出す。
「……わ、私、少しでもいいから立香くんの役に立ちたかったんです」
「うん」
「特異点の修復には参加出来ないから……。始皇帝さんから戦闘の訓練をしていったら私の召喚が失敗した原因が分かるって言われたんです。それで少しでも早く原因を解明して、召喚出来るようになったら、立香くん達と一緒にレイシフトが出来ると思って、それで……」
「……うん」
「もし原因が解明出来なくても、物資を集める事で立香くんが普段こなしている事の負担を減らしたかったんです……」
「……そっか」
　1度口にすると、止まらなかった。立香くんは私の言葉を否定する事なく、ただ優しく、嬉しそうに頷いていた。
「……立香くん、嬉しそうですね」
「え、そりゃあ大好きな友達が俺の為に頑張ろうとする話を聞いて嫌な思いする奴なん

かいないよ」

顔が熱くなるのを感じる。友達と言われるだけでも嬉しいのに、大好きとか……なんて言うか嬉しいやら恥ずかしいやらで胸がいっぱいだ。

「ホントはね、栞には戦わないでいて欲しかったんだ」

「それは……足手まといだから？」

「違う違う。俺が帰って来た時にめちゃくちゃ褒めて欲しいからっていう単純な理由だよ。だから召喚失敗した時少し安心したんだ。栞が戦いに行かなくて済むからって。……でも、そうだね。今の栞には戦うなって言う方が酷だよね」

「はい、私はみんなと戦いたいです」

「うん。俺も栞と一緒に戦いたい――近くで栞を守るよ。もちろん、マシュの事も！」

立香くんにこんなに心配されていたなんて全然気付かなかった。1つだけだけど彼の方が年下なのに。私って頼りないな……。

「そういえば召喚失敗の原因はわかったの？」

「あ、えっと、始皇帝さんは私の心が原因としか……」

「心ねぇ……」

立香くんは眉を寄せ、腕を組んで考え込む。しばらく考えてたみたいだけど、答えが出なかったのかため息を吐きながら体勢を崩した。

「うーん、ダメだ！俺には分かんないや。もしかしたら始皇帝は原因を全部分かってるのかもしれないけど、あの人の事だから栞自身に気付かせようとしてると思うし、教えてくれないよな」
「やっぱり、そうですよね」
始皇帝さんは原因の答えを知っている。でもヒントを教えてくれても答えは教えてくれない。まるで子どもの勉強を見る先生か親のようだ。
そういえば立香くんはロンドンの特異点はいいのだろうかと今さら気付いた。
「り、立香くん。ロンドンはもういいんですか？」
「え？あ、うん、修復終わったよ。そっか、栞は別の所にレイシフトしてたから知らないんだった……。まあ、詳しい事はまたダヴィンチちゃんかロマニにでも聞いてよ」
どうやら心配なかったようだ。今立香くんが話してもいいのでは？とは思ったけど、立香くんに「今色んな事でわりと混乱してるから、ヤバいとしか言えないよ？」と言われたので大人しく明日ダヴィンチちゃん辺りに聞く事に決めた。
そろそろいい時間なので自分の部屋に帰る事にした。立香くんは部屋まで送ろうか？と聞いてくれたがカルデア内でそう危険はないだろうからと断った。
部屋から出て、歩きだそうとする私を立香くんが呼び止めた。
「あのさ、明日もう1回召喚してみない？」

「明日ですか？」
「うん。なんとなくだけど今の栞なら召喚出来る気がするんだ」
「……そうでしょうか」
「まあ、マスターの勘だけどね」
立香くんは頬を掻きながら苦笑した。
はっきり言って自信はない。けど、立香くんがそういうのなら挑戦するのも悪くないのかもしれない。
「私、やってみます」
「わかった。じゃあ明日マシュと一緒に迎いに行くね！」
「おやすみー！」と言いながら大きく手を振る姿につい笑ってしまう。私も小さく手を振り替えしながら部屋へと戻った。
例えどんな結果でも久々に立香くんとマシュと一緒にいられるのは嬉しい。私は明日を楽しみに眠りについた。

# 鏡を見つめる

翌日、お昼近くになっても2人が来ないので不思議に思い、立香くんの部屋に訪ねようと扉を開けるとすぐ近くに見知らぬ男の子が立っていた。
「わっ……!あ、えっと、迷子……かな?」
「断じて迷子じゃない!見た目はガキだが中身は立派な成人男性だ。もっと態度を改めろ」
男の子から渋い声が出てきたのに唖然とする。
彼は「ノックする手間が省けたな」と言いながら、ずんずんと私の部屋の中に入っていった。
「おい、客人が来たんだ。茶ぐらいもてなせ」
「は、はい!」
「俺も本来なら長居する気はないが、マスターからの仕事の依頼でな。……まったく俺を過労で殺す気か?」
お茶を渡しながら彼をそっと見る。マスターと呼ぶのなら彼もきっとサーヴァント

の1人なのだろう。なぜ私の部屋に来たのかは、先程彼が言っていた「仕事の依頼」の内容が関係しているとは思うけど……。

「まずは伝言からだ、『召喚に必要な呼符と石がなかったから今からかき集めて来る。午後までにはなんとかするから！』だとさ。ふん、ろくに貯蓄しないからそうなるんだ。まさに自業自得だな」

「アハハ……」

まさかの内容に思わず乾いた笑いが出てしまった。伝言の内容からマシュが立香くんにぷんすか怒っている姿が想像つく。ここは午後までにはなんとかするという言葉を信じよう。

「伝言ありがとうございます。……えっと」

「……アンデルセンだ」

「よろしくお願いします、アンデルセンさん」

「俺はよろしくするつもりはないがな。他の仕事が残っているからな、さっさと本題に入るぞ。俺はお前と仲良くお喋りをしに来たわけじゃない！」

「し、辛辣……」

見た目が幼いせいか、かなり心にくるものがある。

アンデルセンさんは一口お茶を飲んでから口を開く。

「今回はマスターからお前を思う存分に観察して感想をそのままお前に言って欲しいと言われてな。なんでもお前の召喚失敗の原因の解決への足がかりになるんじゃないか、だとさ」
「か、観察？」
「人間観察。まあ、作家の性分だ。細かいとこは置いとけ。自己分析を他人に押し付けるんだ。存分に見透かしてやるから覚悟しておけ」
「反論があったら言ってみろ、倍にして返してやる」と悪どい顔で言われたので、とりあえず口をつぐむ。アンデルセンさんは腕を組んで少し考える素振りを見せてから評し始めた。
「そうだな。とりあえず今回は失敗の原因となったものを中心に評価しよう。まずお前の性格か？それなら簡単、お前は脆弱で臆病、オマケに受動的！なんともじめじめとした性格ときた！常に誰かに手を引かれないと何も出来ないと言う子どもだな。今まで他人に反発した数を数えてみろ、下手すりゃ片手で足りるんじゃないか？」
　初っぱなからとてつもなく辛辣な評価がきた。反論したい気持ちを押さえながら、思い出せる限りの今までで反発した数を数えてみると本当に片手で足りてしまって驚愕した。
「はははははは！いや、失敬。ホントに片手で足りた事に笑ってしまった。まあ、お前の

純真さは本物だ。それ故に相反する真実と真実がぶつかる時、お前は押し潰される思いをする。せいぜい気を付けるんだな」

「……それは、忠告ですか？」

「逆にそれ以外の何に聞こえる？さて、自分でその性格を踏まえて召喚失敗した日を思い出してみろ。お前はあの時なんと思ったか」

「……」

あの時、私は怖いと思った。カルデアの現状と記録を見て、私ではとてもじゃないけど戦えないと。不安と恐怖がいっぱいで……、でも、立香くんが頑張っているのに私だけ嫌だなんて言えないと思って、それで……。結局私は――

「――戦いたくない。そう強く思いました」

「だろうな。ここの英霊召喚システムはお互いの同意があって初めて成り立つ。失敗の原因なんざ、お前の拒否が原因だろ」

英霊召喚にお互いの同意が必要だなんて知らなかった……。そして確かに始皇帝さんが言うように私の心が原因だった。私が怖さのあまり拒否したのだから。一部とはいえ、月の聖杯戦争を思い出した今はもうそんなに怖いとは思わないけれど。あの時は本当に怖くて仕方がなかったのだ。

「ここまでは依頼されていた分のお前への評価だ。どうだ、答えが見つかって納得した

か？」
「……はい」
「ふん、まあ、この事はあの日関わっていた奴には俺から伝えておこう」
アンデルセンさんはそう言うと椅子から立ち上がり、部屋から出て行った。時計を見れば、もうお昼だった。ご飯食べて、立香くん達を待たないと……。
……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おや？栞ちゃんが来るとは珍しいね。ようこそ、ダ・ヴィンチちゃんの素敵なショップへ！……なんてね。そこの椅子に座ってて。お茶を入れよう」
「あ、いえ、エミヤさんがお茶のポット入れてくれたので大丈夫、です」
私は手に持つバスケットを少し掲げて見せる。中にはエミヤさんから特別に作っていただいたサンドイッチ等気軽に食べられる物が入っている。ダヴィンチちゃんと一緒に食べれるように多めに作ったと聞いている。
「なるほどね。じゃあ、バスケットが置けるようにちょっと机の上を片付けちゃおうかな」

ダヴィンチちゃんは机の上の未完成の発明品や設計図を隅の方に置き、バスケットがちょうど置ける広さを確保してくれた。
「さあ、どうぞ」
「ありがとうございます。――――。あの、アンデルセンさんからは……」
「ああ、聞いているとも。想定していた通りだったから私には答え合わせしているような話だったけどね」
私はバスケットを広げる手を止めて、ダヴィンチちゃんの顔を見た。ダヴィンチちゃんは少し申し訳なさそうな顔をしていた。
「……気づいてたんですね」
「わりとすぐにね。君は目覚めてからすぐにカルデアの現状を知り、時間を置かずにそのまま召喚に挑ませたんだ。想定出来ない方が難しいさ。その事についてはロマニも酷く反省していたよ」
ドクターは優しい人だから今もきっと気にしているだろう事は私でも想像がつく。もう、気にしなくていいのにな。
それはそれとして、ダヴィンチちゃんは最初の方で失敗の原因が何か気づいていたのに、どうして教えてくれなかったのだろう？
それを聞けばダヴィンチちゃんはなんとも困ったような顔になった。

「んーまあ、伝えようとは思ったけど止められたんだよね。――あの天子に」
「始皇帝さんが？」
　いったいいつの間に……。
『原因はあの娘自身が気づかねば意味がない。なぁに、朕に策がある。すべては天子たる朕に委ねよ』ってね。いやぁ、まさか早々に召喚失敗するくらい戦いが怖いと思っている子をレイシフトさせに行くとは思わなかったけどね」
　確かに始皇帝さんは初めて会った時から原因が何か知っている素振りをしていたけれど……。いくら立香くんから聞いているとは言え、私の事を理解し過ぎていないだろか？
「――理解し過ぎているって思っているだろ？」
「……っ！顔に出てました？」
「いいや、私も同じ事を思っていたからさ。どうもあの皇帝はカルデアの数人を深く理解している。最初は千里眼持ちかと思ったけど、そうではないみたいだし……。現状不明のままかな」
「今は敵じゃないだけ有難いよ」とおどけるように話すダヴィンチちゃんにその通りだなと頷く。
　例え始皇帝さんの素性が分からなくてもあの人が立香くんを想って一緒に戦ってく

れていると分かっているだけで十分だと私は思う。
「話は変わりますけど、ダヴィンチちゃんにもうひとつ聞きたいことが」
「ロンドンの話だろう?それについては残念だけど、今は話さないよ」
立香くんに聞くならダヴィンチちゃんあたりにと言われたのもあって聞いたのに断れてしまった。
「ああ、別に意地悪で話さないわけじゃないんだ。そこは勘違いしないでくれたまえ。単純に今は話さないだけだからさ」
「……召喚前だからですか?」
「その通り。まあ、今の栞ちゃんならたぶん問題ないかもだけど……。不安材料は少ない方がいいからね」
「……分かりました」
前科があるから仕方がない。さすがに私も同じことの繰り返しは嫌だ。また召喚が終わってから話を聞きに行こう。
「ダヴィンチちゃーん!栞いますかー!?」
「いるよー!」
いきなり立香くんの元気な声が聞こえて私はビクリと驚いた。ダヴィンチちゃんはさして驚きもせず、普通に返事を返していた。立香くんは返事を聞くやいなや慌ただし

く部屋に入ってきた。

「栞待たせてごめんね！今からならいつでもオッケーだから早速行こう！」

「あ、はい！……今度からは節約しなきゃダメですよ？」

「……善処します」

今の間と目を逸らす姿になんとなく、またやらかすんだろうなと確信した。誤魔化すように立香くんは私の手を握り「ダヴィンチちゃん、またあとで！」と早足で召喚部屋に向かい始めた。今回はダヴィンチちゃんは来ないのかと振り返って見れば、ダヴィンチちゃんは「感想、楽しみにしているよ！」とだけ笑って私達を見送った。

召喚部屋に入るとマシュとドクターがいた。ドクターは私の姿を見ると駆け寄って来て、思いっきり頭を下げてきた。

「栞ちゃん、ほんっとぉ～にすまない！」

「ド、ドクター頭を上げてください！私全然気にしてませんからっ！」

なんだかマシュの時を思い出すけど、マシュは土下座だったので今の状況はまだ幾分かマシなのかもしれない。いや、よくはないけども。

ドクターは頭を上げると申し訳なさそうな顔をしていた。

「いいや、医療に携わっている者として非常に情けないかぎりだよ……。目覚めて間もなくカルデアの現状とかこれからの戦いの途方なさとか聞いたらメンタルに支障がきているに決まっているじゃないか。はぁ……」
「ドクター……」
「それに、ボクは多大な勘違いをしていたんだ。立香くんのなんだかんだで、すぐに順応して立ち向かえる姿を無意識に栞ちゃんにもそれを要求してしまった。ボクの思い込みをキミに勝手に押し付けたんだ。……すまない」
　……正直、ここまで気にしているとは思わなかった。もしかしたら何年かの付き合いがあったからこそ、余計に気にしてくれていたのかもしれない。
「……ドクター、私はあの日失敗して良かったのだと思います。何も知らないままやってた方が後から後悔していたかも知れませんし。……それに大切な記憶を思い出せましたし」
「大切な記憶？」
「今は……内緒です。だから、もういいんですよ」
　渋々だが納得してくれたドクターは召喚の準備をしてくれた。
「此方の準備は出来たよ。……栞ちゃん、覚悟はいいかい？」
「……はい」

もしかしたら玉藻に会えるかもしれないと、期待している自分がいる。彼女は応えてくれるだろうか。

私はあの時のように装置に石を3つ置き、魔力を流していく。サークルは問題なく起動した。

あの時と違い、青い光の輪がいくつも回って虹色の光が輝き出す。あの時の比ではない眩しさに思わず目を閉じる。しばらくして光が収まった頃、あまりの静かさにまたあの時と同じではないかと不安に思い目を開けるかどうか迷っていると

――――――知らない声が聞こえた。

「……おや、お前か。死の氷雪に君臨する我が身を呼んだのは。私は神霊スカサハ＝スカディ。北欧の古き神々の花嫁にして、かつて女王でもあった。……今からお前のサーヴァントとなる者だ」

# 番外編

## ☆バレンタインは戦争だと云々～藤丸立香ｓｉｄｅ～

バレンタイン。それは女にとっても男にとっても負けられない聖戦である。

俺は今年のバレンタインが楽しみで仕方がなかった。前回のバレンタインでは女性サーヴァント達が作った謎の動くチョコ大捜索で酷い目に合ったけれど、今年はエミヤ達カルデア・キッチンのメンバーが念入りに監視する予定なのでその心配もないはずだ。そうそう問題なんて起こるわけがない！（フラグ）

なんといっても今年は栞から友チョコが貰える可能性大なのだ。テンションが上がりまくりで正直どうにかなりそうだ！

マシュのチョコは心配していない。あのキュートでユニークな頼れる素敵な後輩は今年も用意してくれると信じている。

心配といえば、はたして栞は料理が出来るのだろうか？している所なんて今まで見た事がない。まあ、栞がメシマズ枠の人間でも俺は食べきる自信はあるのだけども。なんたってここ最近エリちゃんやハロエリちゃん、ブレエリちゃんはてにはカーミラさんの

料理の味見係をしてきたので胃が丈夫になったのだ。今なら食べても吐血しかしない！……全員同一人物じゃないかというツッコミは受け付けない。

なので、ちょっとぐらいのメシマズなら問題ないのだ。

俺はバレンタインまで残りの数日間を胸にトキメキを抱きしめながら過ごそう。きっと今の俺の顔は誰が見ても幸せに満ちた顔だと答えるだろう。

「へい！チョコを期待している若きマスターにまっこと残念なお知らせです」

「うわ、ジャガーいつの間に！」

「今年は！チョコが！ありませーん！」

「な……なんだってー!?!!」

俺の幸せがすぐさまぶち壊された。

詳しい事を聞けばなんでもチョコに必要なカカオが今年は用意出来ないのだと言う。いったいどういう事だ！

問い詰めようとジャガー方を見ればもうどこにもいなかった。なんて足の早い……！

怒りをぶつける相手がいなくなり、俺は頭を抱えて床に項垂れる。こんな事があっていいのか？大好きな友達と後輩からのチョコがまさかの原材料入手不可という理由で

貰えないなんて事があっていいのか？……いいわけがない!!

――どうにかして入手しなければ！

俺の想いが届いたのか、凄い勢いで清姫が入ってきた。そういえば今日は見なかったな。

「旦那様（ますたぁ）！どうか私の願いを聞いてください！」

「ごめん、清姫。こっちも今立て込んでいて……」

「私とチョコを生産しに行きましょう！」

「よし、きよひーでかした!!!」

そして俺はチョコ製造特命大臣となり、虚栄の空中庭園（チョコレート工城）で狂ったようにチョコを生産し続けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……正直に言おう。あの時の俺はどうかしていた。

なぜ、あそこまで狂ったようにチョコを作り続けたのか。さすがに宇宙進出とか平行世界からチョコを呼び寄せたりはやり過ぎた。危うくカルデアがチョコの海に沈む所だった。……すみません、すっげぇ楽しかったです。

まあ、チョコレート工場事件も無事に終わり、バレンタインの為のチョコを手に入れたサーヴァント達も喜んでるので最終的にはこれで間違いなかったのだろう。

今年もサーヴァント達とチョコを渡したり渡されたりしながらカルデア内を回っていく。

俺のチョコは無難なトリュフにした。エミヤにもお墨付きを貰えたので味は大丈夫だ。

なんとか栞とマシュに会えればいいんだけど……。

「あっ、先輩！」

聞き慣れたマシュの声が前方から聞こえた。まだ遠くにいたけれど、マシュは手に持つ２つの箱の中身に気遣いながら小走りでこちらに駆け寄って来た。

「先輩、どうぞ受け取ってください！」

「今年もありがとう、マシュ！俺からも、はい！」

「！ありがとうございます！」

箱の中身はどうやらケーキのようだ。切り分けはまだらしく、後で一緒に食べたいと思う。

マシュに栞に会えたか聞く事にした。もしかしたら、もう会っているかもしれない。

「これから栞さんの所に向かう予定なのですが、緊張してしまって……」

「えー、俺の時より？」
「いえ、そんな事は！……ただ私、友人に渡すというのが初めてで、ドキドキしてしまい」
「それは、確かに緊張するね。俺も栞を探してたし、一緒に会いに行こうか」
「はい。先輩、ありがとうございます！」
一度マシュからのチョコを保管する為に俺の部屋に寄ってから、栞の部屋に向かう。
……んー、部屋にいてくれたらいいんだけど。
部屋に向かう道中、ちょうどいいのでマシュに気になる事を聞く事にした。
「ねぇ、マシュ。栞には何を渡すの？」
「えっと、先輩のとは色違いのケーキです。先輩はホワイト、栞さんにはミルクティーで作りました」
「おお、それも美味しそう」
マシュと栞の許可が貰えたらシェアしてくれないだろうか。……美味しいと言えば。
「マシュは栞が料理しているの見た事ある？」
「えっ！……どうでしょうか。実は私と栞さんはあの日まで、あまり接点がなかったのでそこまで詳しくないんです」
「そうなのかぁ……」
例えメシマズ枠でもエリちゃんズ以上はいないだろうから食べきる自信はあるけど

も、やっぱり気になるものは気になる。
　そんな事を考えてる内に部屋に着いてしまった。俺は栞の部屋の扉をノックする。いたらいいんだけど……。
　少しすると無言で扉が開いた。
「ん？なんだ、お前か。栞に用か？生憎だが今栞は留守だ」
　中から出てきたのはスカサハ様だった。思わず落胆してしまいそうになるが、相手は神霊でしかもどこかの王様だった人だから、そんな事をすれば不敬だし、下手をすればしばらく栞への接触禁止令を出されかねないので、態度に出ないようにぐっと我慢する。
「……今、失礼な事を考えなかったか？」
「いえ、全然。ところで栞がどこにいるかご存知ですか？」
「……まあ、よい。栞は確かお前たちの部屋に向かったはずだ。大方、他のサーヴァントに捕まったか何かで入れ違いになったのではないか？」
　なるほど、十分ありえる。今から戻れば会えるかもしれない。スカサハ様に礼を言ってから、来た道を戻りながら栞の姿を探す。
　案の定スカサハ様の言っていた通り、前方から入れ違いになっていたらしい栞がトボトボと歩いていた。顔は俯いてるから俺達には気付いていないみたいだ。……ちょっ

と驚かせたくなってきた。深く息を吸って――

「栞！」

「ひゃあっ！……あ、立香くんにマシュ！よかった、今日はもう会えないかと……！」

「どうやら入れ違いになっていたみたいで。無事に会えて良かったです！」

駆け寄って来た栞の顔を見れば、驚いたせいか若干涙目になっていた。なんか、ごめん。

「栞さん、これをどうぞ！」

マシュが栞に箱を渡すのを見て俺も慌ててチョコを渡す。

「俺も、これ！」

「２人ともありがとうございます！」

栞が嬉しいそうに受けとる姿に見て、マシュの方を横目に確認する。マシュも嬉しいそうに笑っている姿を見て俺も自然と笑顔になった。

「では、私からも……どうぞ！」

栞は見るからにたくさん入ってそうな紙袋を俺とマシュに渡してくれた。中を見るとクッキーやカップケーキなど色々なお菓子が入っているみたいだ。俺とマシュのを合わせたらちょっとしたお菓子パーティーが出来てしまえそうだ。あと見た目からしてエリちゃん枠じゃない！

「すごい！全部手作り？」
「はい。……まあ、何を作ればいいか散々悩んでしまって、結局簡単な焼き菓子をたくさん作って誤魔化すカタチになってしまいましたけど」
本当はもっと凝ったケーキとか作れたら良かったんですけどねと栞は少し照れ臭そうに言った。けど、簡単な焼き菓子とは言ってもこの量と種類の多さは素直にすごいと思う。
「私、部屋に戻ったら大事に食べます！焼き菓子なので何日か保存は聞くはずですし」
「私もマシュからのケーキ大事に食べますね！」
２人が笑い合う姿に俺はほのぼのとした気持ちになる。俺はこの日の為にチョコを量産したんだなぁ。いやぁ、報われた。
こうして俺の今年のバレンタインは目的も無事に達成し、平和（？）に終わったのであった。

# ☆バレンタインは戦争だと云々～雪白栞ｓｉｄｅ～

バレンタイン。それは自分の恋心や感謝の気持ちを相手に贈る素敵な日。
私は生まれて初めてバレンタインというイベントに参加する。別にバレンタインを知らなかったわけじゃないけれど、ただ渡す相手がいなかったのと当時のカルデアはそういったイベントをする事がなかったからだ。
けど、今回は違う……。何て言ったって初めての友達である立香くんとマシュがいるから!!!これはもう腕によりをかけて作るしかない！気合いは！十分です！
「おい栞、何故部屋の中心でガッツポーズなどしている？」
「あ、スカディ様。いえ、これからの事に向けて気合いを入れてました」
いけない、スカディ様がいる事をすっかり忘れていた。もちろん、スカディ様のチョコも用意するので本人には内緒だ。「こういうのはサプライズ性が大事なのですぞ」とシェイクスピアさんも言っていたから間違いない。
「そういえば、今年はチョコが用意出来ないそうだ」
「えっ、そ、そんな……」

「なんでもチョコに必要なカカオが調達出来なくなったとかなんとか……」
　血の気が引く感じがした。チョコがないなんて、そんなの困る。それではみんなに作れない……！
「まあ、栞には関係あるまい。用意出来ないのは『サーヴァント用プレーンチョコ』だ。栞には普通の製菓チョコで十分であろう」
　それを聞いてホッとした。それなら問題なく作れそうだ。でも、サーヴァントのみんなが作りたくても作れない状況なのはなんだか悲しいものがある。
「サーヴァントのみなさんは普通のチョコで作ってはいけないのですか？」
「去年は普通のチョコで作ったらしい」
「じゃあ……！」
「だが、サーヴァントの魔力にあてられ暴走し、チョコが逃げ回ったそうだぞ」
「――――」
　逃げる？チョコが？
　去年の今頃は確か私はまだ眠っていたから……。
　眠っている間になんて愉快なイベントが……。
「は、早くサーヴァントのみなさんのチョコが手に入ればいいですね」
　私には目を逸らしながら言うのが精一杯だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……酷い目にあった。私は参加していなかったので詳しい事情は知らないけれど、どうやらセミラミスさんという方の所でチョコを生産して、その生産量が膨大な数になり、カルデアがチョコの海に沈みかけたのだ。……うん、意味が分からない。

私も廊下を歩いていたらチョコの波に襲われて溺れそうになった。ちょうどサーフィンをしていたモードレッドさんが引き上げてくれたから良かったけれど、あのままチョコの海で溺死してたらと思うとゾッとする。

でも、まあ、サーヴァントのみなさんがチョコを手に入れて喜ぶ姿を見たらこれで良かったと、思い、たい……なぁ。

今は用意したチョコを渡しに行く為にカルデア内を歩いていた。

いちおう、それぞれ個別に用意したけれど、立香くんとマシュのお菓子だけこれといったものが決まらず、お菓子の詰め合わせみたいになってしまったのが少し心残りだ。これはもう来年へのリベンジだと私の心の中で決定した。

２人へのチョコは量が多くて少し重いので、あとから渡す事にして、まず玉藻達を探す事にした。

「ご・しゅ・じ・ん・さ・ま♡」
「うひゃぁ！キャ、キャスター!?」
　玉藻がもにゅっと背後から私の胸を鷲掴みしながら抱きついてきた。し、心臓に悪い……。
「はい、貴方の可愛い良妻狐タマモちゃんです！」
　きゃぴっと可愛らしくポーズまで決める玉藻にため息を吐く。カルデアに召喚されてからスキンシップが過激になってきたように思う。いくら注意しても止めないので半分諦めてきている。
「ところでご主人様、今日は何の日かご存知ですか？」
「……バレンタイン、ですよね。玉藻の分もありますよ、はい」
「キャー！ありがとうございます～♡」
　狐耳を嬉しそうにピコピコさせながら受け取ってくれた。そういう所は本当に可愛いと思う。
「大事に食べますね！あとこちら、私からご主人様へのバレンタインチョコです。味はもちろん、見た目も拘りましたので、是非ご堪能くださいませ」
「ありがとう、玉藻。開けてもいい？」
「はい、ぜひぜひ！」

出来るだけ丁寧に包装を取り、蓋を開けると中から艶々と輝くチョコが9つ入っていた。どれもデザイン違いで1つ1つ丹精込めて作られた事がよく分かる。
「キレイ……」
「ありがとうございます。味の方は部屋に戻ってから堪能してくださいましね」
「はい！」
玉藻と別れ、立香くん達を探す。玉藻とも早くに会えたのだから、このまま順調に会える気がする。

――――と、私は長年暮らしていながら、カルデアの広さとサーヴァントの数の多さを甘くみてしまっていたのだ。

「……会えない」
渡したいサーヴァントには何とかほぼ全員渡す事が出来た。けど1番会いたい立香くんとマシュには会えず仕舞いなのだった。部屋にも訪ねたが生憎と留守だった。
「……どこかで入れ違ったのかな」
あっちもあっちでサーヴァントに渡し歩いているのだろうし、どこかで入れ違った可

能性は十分高い。……もしかしたら今日は諦めた方がいいかもしれない。
とりあえず貰ったチョコやお返しの品を1度部屋に置きに行こう。数的には変わらない筈なのに何故か行きよりも沢山な気がするのだから不思議だ。大きさの問題かな？
少し現実逃避をしながら床を見ながらトボトボと歩く。楽しいイベントの筈なのに何だか溜め息を吐きたい気持ちだ。
「栞！」
「ひゃあっ！」
突然大きな声で呼ばれて、驚き顔を上げると私が今1番会いたいと思っていた2人がいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「スカディ様、ただいま戻りました！」
「おかえり。その様子だと無事、会えたようだな」
「はい！」
ニコニコしながら貰ったケーキやチョコを冷蔵庫に仕舞う。そして冷凍庫からスカ

ディ様へのバレンタインチョコを取り出す。喜んでくれるだろうか。
「はい、スカディ様。ハッピーバレンタインです」
「うむ、受け取ろう。……おお、これはチョコアイスだな。さすが栞、私の事をよくわかっている」
スカディ様は「では早速」と、スプーンでアイスを掬いパクリと嬉しそうに口にする。味わうように口をモグモグしていると目がキラキラと輝き出した。どうやら気に入ってもらえたようだ。
「……っ！栞、このアイス、いつもと食感が違って美味いぞ！」
「ありがとうございます。実はですね、それ手作りなんです！」
「て、手作りだと！アイスは作れるものなのか!?」
驚きながら私と手元のアイスを交互に見る。いつもは凛としていてカッコいいのに、ふとした時に可愛らしい反応を見せるのだから、堪らない。この反応が見たいが為に、彼女が喜ぶ事をついつい探してしまうのだ。
私は戸棚に入れてた物を取り出し、おもむろに机の上に置く。
「こちらアイスクリームメーカーです。前に興味本位で通販で買ったのを思い出して引っ張り出してきたんです」
アマゾネス・ドットコムは頼りになります！

「ふわぁあ……。栞、私はこれから毎日お前の手作りアイスを所望する！」
「え、さすがに毎日は……。せめて週１にしてください」
「むぅ……。いや、そうだな。こういうのはありがたみが大事だからな。週に１度のアイスの日……。うむ……うむ、なかなか悪くない」
うっとりしながら、もう週１のアイスに心踊らせるスカディ様に苦笑が漏れる。これは忘れたら大惨事になりそう……。
「――あっ、すっかり忘れるところだった。ほら、私からお前にだ」
スカディ様からの小包を受け取り、許可を取ってから開けると、アイスキャンディ――のようなものに見える。
「ただのアイスキャンディ……じゃないですよね？」
「ああ、それは氷に魔力で味をつけたものだ。私のいた場所でこれを我が子らへ配り歩いた事もある。お前は私の愛する我が子同然――――というわけではないが、まあ、なんだ、似たような扱いはしているからな、うん」
「ふふ、ありがとうございます」
照れ臭そうに話すスカディ様に嬉しくて笑みが溢れる。それに対してスカディ様は「あまり笑うでない」と、少し拗ねたように、またアイスを口に運ぶ。
「せっかくなので私も週１でアイスキャンディをいただきますね」

「……そうだな。一緒に食べよう」

また1つ楽しみが増えた。そんな素敵な日になれた気がする。